

付録1. 敬虔主義とゲーテ

1.

2001年8月28日から9月1日にかけて、ハレ・ヴィテンベルク大学の「敬虔主義研究のための学際的センター」と、フランケ・シュティフトゥンゲン (Franckesche Stiftungen)¹ および敬虔主義研究歴史的委員会との共催で、記念すべき敬虔主義研究第1回国際会議がハレで開催された。敬虔主義 (Pietismus) と言うと、かつてはドイツ・ルター派内の信仰革新運動というイメージがあったが²、現在では改革派、更にはドイツ国外での同種の運動も含み、敬虔主義研究も国際的な広がりを呈するようになってきた³。また所謂ラディカルな敬虔主義⁴も正当な評価を受けるようになった。これらのことを上記国際会議に参加して身をもって実感した次第である。このような質および量における敬虔主義研究の進展が、国際会議を開催させる原動力となったのであろう。

さてその2年前の1999年は、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) 生誕250周年にあたる。フランケ・シュティフトゥンゲンでも、1999年3月25日から27日にかけて展示会「分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフー

1 伊藤利男『孤児たちの父フランケ』では、「フランケ学園」と訳されている。

2 例えば、『キリスト教大事典』(教文館、初版1963年、改訂新版第9刷1988年)では、「敬虔主義」とは「ルター派の正統主義に対する改革運動」(371頁)であるという記載がある。

3 Vgl. Strom S.544.

4 Vgl. Strom S.543. 「ラディカルな敬虔主義」とは、制度としての教会に対して否定的な態度を持ち、墮落した領邦教会から分離する傾向、所謂分離主義 (Separatismus) の傾向を多分に有する敬虔主義のこと。そのため遁世的傾向や、宗派の信条を越えた超教派的傾向も認めることができる。但し、ラディカルな敬虔主義という名称自体は、現代の教会史研究で用いられる言葉である。

ト派。ゲーテと〈国内の静かな人々〉⁵ (Separatisten, Pietisten, Herrnhuter. Goethe und die Stillen im Lande) が催された。そして展示会に随伴してシンポジウムも同時開催された。このシンポジウムに基づく寄稿論文を集めたのが、ケンパー (H.-G. Kemper) とシュナイダー (H. Schneider) の編集による『ゲーテと敬虔主義』⁶で、2001年に出版されている。

この論文集は、「これまでほとんど注目されず過小評価されてきた著者〔:ゲーテ〕と彼の時代の諸関連を新たに発見し、「まさにそのことによって彼の作品が新たに読み得るようになり得る」(GP VII) 機縁を我々に与えてくれるものと思われる。何故なら、敬虔主義はまさにそのような諸関連の一つであるからである。

もとよりゲーテは敬虔主義者ではない。しかしゲーテが「敬虔主義的な敬虔 (die pietistische Frömmigkeit) との出会いによって多様に靈感を与えられた」(GP VII) ことは否定することのできない事実である。この事実は、従来あまりに過小評価されてきたように思われる。一般に日本のゲーテ研究者・愛好者は、キリスト教が嫌いなようである。例えば、彼の作品„Die Leiden des jungen Werthers“は福音書を連想させる箇所が多々あり、ヴェルターの (die) Leidenをイエスの受難・受苦 (Passion, das Leiden) に直接結びつけることはできないにしても、両者は無関係ではない、とさえ私自身は思っている。にもかかわらず我が国では、同書は伝統的に『若きヴェルターの悩み』と訳されている。勿論この作品でも既存のキリスト教会に対する批判は厳しく、この作品をキリスト教的と呼ぶことは全くの的外れである。しかし、Leidenが感傷的な「悩み」という邦語で訳されることによって、この作品が感傷的で弱々しい性格のものと思われ、更にイエスの受難を連想する可能性まで絶たれるのはまことに残念である。

5 「国内の静かな人々」という表現は、詩篇35章20節から取られたものである。この表現は、17世紀後半からラディカルな敬虔主義者に対して用いられるようになった。その意味は用いる人によって異なっていたが、18世紀には、世俗的な生活や公的な教会制度から身を引いて、私的に宗教生活にいそしむ敬虔な人々という意味で広く用いられるようになった。(Vgl. Wallmann S.101.)

6 Hans-Georg Kemper u. Hans Schneider (Hg.): Goethe und der Pietismus. [Abk. GP]

上で既存のキリスト教会批判と言ったが、敬虔主義の出発点も、性格こそ違え、そのようなキリスト教会批判である。そしてゲーテが出会った敬虔主義は、よりラディカルな敬虔主義なのである。ゲーテ生誕250周年を記念して行なわれた展示会の名称は、実はゲーテの『詩と真実』（*Dichtung und Wahrheit*）第1章の或る箇所に基づく。その箇所の前では、「教會的プロテスタンティズム」は無味乾燥な一種の道徳であり、その教義は我々の魂にも心にも訴えるところがないと言われ、更に次のように続く。「そのため、律法的教會（*die gesetzliche Kirche*）からじつにさまざまな分離が起こった。分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派、国内の静かな人々が生じた、彼らはその他さまざまな名称で呼ばれているが。しかし彼らは、とくにキリストを通じて、公認の宗教の形態では可能とも思えないほどに神に近づこうとする意図をもっていた点では、いずれも同じであった。」（HA 9, 43）⁷ ここではゲーテ自身の既成キリスト教会に対する批判と、敬虔主義に対する高い評価を窺うことができる。ただ、「分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフト派」等の名称が特に定義が与えられることなく並列されていることに注意しなければならない。実は敬虔主義には、教会内敬虔主義（*der innerkirchliche Pietismus*）とも言うべきシュペーナ的な意味の穏健な敬虔主義があり、それが謂わば本来の敬虔主義であった。これはフランケによって継承され、ハレがその中心地となる。しかしゲーテは律法的教會と敬虔主義的運動の対照を際立たせるために、意図的に教会内敬虔主義という形態を無視したのである⁸。またフレーゼニウス（*Johann Philipp Fresenius*）もハレ派の意味での敬虔主義者であるが、ゲーテは彼が「ヘルンフト派には反対の態度をとっていたので、これらの分離した敬虔な者たち（*die abgesonderten Frommen*）にはあまり評判がよくなかった」（HA 9, 143）と書き、彼を敬虔主義者の名では呼んでいない。このようにゲーテに影響を与えたのは、穏健というよりむしろラディカルな敬虔主義であることが分か

7 訳は潮出版社版『ゲーテ全集』を用いたが、部分的に訳を変えているので、最終的な文責は本稿執筆者にある。また『詩と真実』の引用箇所は、ハングルク版ゲーテ全集〔略語：HA〕による。

8 Vgl. GP, S.262.

る。もっともヘルンフト派はラディカルな敬虔主義に含めないのが普通であるが⁹、ラディカルな性格を帯びた宗教団体であることは否定できない。

キリスト教、或は敬虔主義は決して一枚岩ではなく、内に多様な要素を含んでいるのである。したがって我々は〈キリスト教〉、或は〈敬虔主義〉という言葉で勝手なイメージを作りあげてしまい、そのような偏見的イメージから、例えば「ゲーテと敬虔主義」というテーマを裁断してしまうようなことを心から慎まなくてはならない。特にキリスト教の伝統のない我が国では、そのような危険は大きいと思われる。『詩と真実』に関しては、上述の論文集のギュンター・ニグル（Günter Niggel）の論文「『詩と真実』におけるゲーテの敬虔主義像」が、ゲーテと敬虔主義との関係を考察するうえで大いに参考になるであろう。

2.

先ほどの『詩と真実』第1章の引用に続いて、ゲーテは、「〔敬虔主義者は、〕その独自性（Originalität）、心情性（Herzlichkeit）、堅忍（Beharren）、自立性（Selbstständigkeit）などによってひとの心をひきつけた」（HA 9, 43）と書いている。ニグルはこれらの徳目でゲーテは次のような意味を込めているのではないか、と主張している。即ち、「独自性」によって「敬虔主義者たちが聖書の源泉および原始キリスト教へ回帰したこと」を、更にひょっとして「再び刷新された〈再生という理念〉」もゲーテはほのめかしているかもしれない、「心情性」によってゲーテは恐らく「内なる人の〈建徳〉と感情に満ちた〈敬虔〉」を意味し、「堅忍と自立性」によって「公的教会の外部で〈直接に神の子である〉」という彼らの新しい立場」を完全に承認している、と。

9 ヘルンフト派とは、ヘルンフトの地でボヘミア-モラヴィア兄弟団がツィンツェンドルフによって再興されたものであるが、実質上はほとんど彼によって新しく創設されたと言ってよい。（Wallmann S.109）ツィンツェンドルフは、特に若い頃は（ラディカル敬虔主義に分類される）フィラデルフィア運動の影響を受けており、兄弟団設立もその延長上にある。（Wallmann S.103）彼の所謂エーバースドルフ聖書（Ebersdorfer Bibel）にもフィラデルフィア運動の影響を見ることができる。（Vgl. Schneider, Bd.2, S.192f., Anm.394）

しかしニグルによれば、これらの徳目の意味は以上で尽きるのではない。「独自性、心情性および自立性で同時に後の天才美学の主要点が挙げられている。それ故に、『詩と真実』における敬虔主義の最初の素描において既に、ほとんど気付かれずに将来の新しい文学の開拓者としての敬虔主義の重要な精神的役割が暗示されるのである。」(GP 259) 敬虔主義がゲーテにおいて持つ重要な意味を示唆する発言である。

このような敬虔主義の叙述を受けて、幼いゲーテは「直接神に近づこう」(HP 9, 43) と香燭を用いて独自の旧約聖書の犠牲を捧げるのである。しかし結果は、蠟燭が燃え尽きて、赤い漆と美しい金の花を焦がしてしまうのである。第1章の最後でゲーテは次のように言っている。「この偶然の出来事は、このような方法で神に近づこうとすることが、一般にいかに危険であるかということの暗示であり警告であると考えてもさしつかえないであろう。」(HA 9, 45) 敬虔主義に刺激されて、このような「独自の、自立した、心からの礼拝の形式」(GP 260) で礼拝を行なったことは確かであるが、幼いゲーテの行なった礼拝は、敬虔主義的というよりも、自然宗教的、せいぜい旧約聖書的なものであることも明らかである。それ故に、ゲーテの言う「このような方法」が「敬虔主義的な自立性」を含んでいるのか、或はむしろ、「すべての共同体の外で敢行された一人だけの〈神への直接性〉」(GP 260) という幼いゲーテの行なった礼拝しか意味していないのかは不明である。後者の場合には、「敬虔主義者の態度は、〈無味乾燥な教会性〉と、〈怪しげで、我意的・宗教的な押し付けがましさ〉という両極端の間の生ける穏健な中道」(GP 260) ということになるであろう。

『詩と真実』第8章に移ろう。ライプツィヒでの略血の後に愛情をもって世話し励ましてくれた(1768年8月)友人たちの内で最も重要なランガー(Ernst Theodor Langer)も、ゲーテの敬虔主義像を考える上で重要である。ゲーテは、キリスト教が「それ自身の〈歴史的で実定的なもの〉」、即ち特にイエス・キリストの啓示と、「純粋な理神論」との間で動揺していると主張する¹⁰。この二つによって信仰者も二つのタイプに分類されるが、ランガ

10 HA 9, S.334.

ーは啓示宗教を信奉するタイプに分類される。ゲーテによると、ランガーは他のすべての伝承にまさって聖書を尊重すると同時に、神との関係において「仲介」が必要であると考えていた¹¹。しかし、ランガー自身が敬虔主義的考えの持ち主であったかどうかは明言されていない。この点は重要である。ニグルは、「当時ゲーテが敬虔主義的な思想世界と信仰世界にどの程度接近したか」は、『詩と真実』では三重の仕方でも覆い隠されている、としている。「第一に回心（Bekehrung）が聖なる書としての聖書に対する畏敬の刷新に制限されているが、更にそのことが〔ゲーテ自身の〕以前の見解への単なる回帰として解釈される。第二に、福音に対するこの新たな関心が病人の感じやすい状態でもって説明される。第三に、ランガーがどれだけ敬虔主義的な信仰潮流の代表者であり得たかは、周到に秘匿されている。」（GP 262）ゲーテの敬虔主義に対する微妙で複雑な関係を読み取ることができるであろう。

ゲーテはその後フランクフルトに戻って、1778年から1779年にかけて病氣療養の時期を送る。その時に母の友人であるクレッテンベルク嬢（Susanna Katharina von Klettenberg）に出会う。『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』における「或る美しき魂の告白」は、彼女の談話や手紙から生まれたものである¹²。周知のように、クレッテンベルク嬢はヘルンフト派に近い立場の人として描かれている。彼女についてはゲーテ研究でよく知られているので、ここでは『詩と真実』における彼女についての記述に関連して一つだけ指摘しておきたい。彼女は両極端の中間の道を歩んだ人としてゲーテによって評価されているが、両極端の一つの極端を代表してグリースバハ夫人（Frau Griesbach）の名が挙げられている¹³。ニグルによれば、彼女は「厳格で、冷静で、学識のある、それ故に『大いなる装備』（ゲーテの表現）を持ち合わせている〈敬虔主義の一変種〉」（GP 263）を代表している。「大いなる装備」ということで、ゲーテは「ハレの回心体系」（GP 263）をほのめ

11 HA 9, S.334f.

12 HA 9, S.338f.

13 HA 9, S.339.

かしているというのである¹⁴。ここでもハレの穏健な敬虔主義は低い評価しか受けていないし、ゲーテ自身はグリースバハ夫人に対して敬虔主義という言葉を用いていない。

3.

『詩と真実』第8章では、更にアルノルト (G. Arnold) が言及される。彼はラディカルな敬虔主義者の中で最も重要な人物の一人であり、彼についてはラディカルな敬虔主義者の中で最も研究が進んでいる¹⁵。ゲーテはアルノルトの『教会と異端の歴史』によって、「これまで狂気あるいは背神として説明されていた多くの異端者について、より有利な概念を私に与えてくれた」(HA 9, 350) と言い、彼自身についても、「この人はたんに省察をこととする歴史家ではなくて、同時に敬虔な、情感の深い人物であった」(HA 9, 350) と非常に高い評価を与えている。ゲーテにおいて、ラディカル、或は分離主義的な敬虔主義の評価が高い理由の一つは、彼らが「自分自身の宗教」(HA 9, 350) を持っており、また彼らからそのこと、即ち自分自身の宗教を持つことを学んだ点にある、と言ってよいであろう。

論文集『ゲーテと敬虔主義』の中では、編者の一人であるシュナイダー氏がゲーテとアルノルトの『教会と異端の歴史』との出会いについての論文を書いている。

ここでもう一冊取り上げたいのは、このシュナイダー氏の60歳誕生日記念

14 ヴァルマンはハレの敬虔主義に対して「回心敬虔主義」(Bekehrungspietismus) という言葉を使っている。またフランケの弟子である牧師ミシュケ (Johann Mischke) は、1729年に、ツィンツェンドルフが〈回心〉や〈悔い改めの闘い〉を体験していないが故に、彼が神の子であることを認めなかった。かくしてツィンツェンドルフはハレの敬虔主義と対決することになる。結局ツィンツェンドルフは、ハレ派の主張する〈悔い改めの闘い〉と〈回心の方法論〉を完全に拒絶するに至る。(Vgl. Wallmann S.121)

15 日本での研究はほとんどないが、彼のソフィア神秘主義に関しては、本書第3章で取り扱っている。

誌である論文集『受容と改革』¹⁶である。この論文集では、シュラーダー（H.-J. Schrader）とヴァルマン（J. Wallmann）がゲーテに関連した論文を寄稿している。特に後者の論文は、「分離主義者、敬虔主義者、ヘルンフォート派？ ゲーテと〈フランクフルト・アム・マインの教会的敬虔主義〉」というテーマについて書かれており、本稿とも関連が深い。

以上舌足らずな紹介になってしまったが¹⁷、日本では敬虔主義的な視点からのゲーテ研究があまりに少ないので、ゲーテの専門家でもない筆者が非力をも顧みず「敬虔主義とゲーテ」について一文を草した次第である。伊藤利男氏も言われるように、「敬虔主義はわが国では、まだ未開拓というに等しい研究領域」¹⁸である。拙文を契機に、一人でも敬虔主義に興味を持って下さる方があれば嬉しい。

（本稿は、2003年3月に印刷されたもの¹⁹に、若干の手を加えたものである。）

16 Wolfgang Breul-Kunkel u. Lothar Vogel (Hg.): *Rezeption und Reform. Festschrift für Hans Schneider zu seinem 60. Geburtstag*. Darmstadt u. Kassel: Verlag der Hessischen Kirchengeschichtlichen Vereinigung, 2001. 私事にわたって恐縮であるが、このシュナイダー氏の記念誌で、彼の誕生日を祝う者の氏名一覧に筆者の名前も記載されている。

17 補完の意味もあり、ニグルの論文の最後の段落を訳出しておく。「総括的に我々は次のように書き留めることができる。『詩と真実』で次第に高まるテーマとモチーフの流れにおいて、ゲーテは様々な年齢の段階で起こる、自伝的な〈私〉と敬虔主義とのすべての重要な出会いを、それが特殊な潮流との出会いであれ、代表的な個々の人物との出会いであれ、まったく微妙な陰影を付してであるが、一般的にはポジティブに描いている。しかも、彼が敬虔主義的な出会いのそれぞれに時代の精神的生におけるアウトサイダーの役割を認め、それ故に宗教的、哲学的、および美学的観点において、敬虔主義的出会いが成長する〈私〉への絶えざる生産的な影響を持つことを認めることによって、そのように描いているのである。かくして敬虔主義の意味は、人間としての彼にとってと同様に詩人としての彼にとっても際立たされ、このことによってこの芸術家の生の描写における中心的な意味が敬虔主義に付与されるのである。」（GP, S.268）

なお、敬虔主義については『詩と真実』第15章の記述（HA 10, S.41ff.）も重要である。（Vgl. GP, S.266-268.）

18 伊藤 9頁。

19 関西大学独逸文学会『独逸文学』第47号（2003年3月）所収。

付録2. ヘーベルとハイデッガー

序

ヨハン・ペーター・ヘーベル (Johann Peter Hebel, 1760-1826) は、日本人の手になるドイツ文学史においては無視されるか、せいぜい数行の記述で済まされるのが普通であった。日本ではまだドイツの文学史をその深みにおいて把握するほどには成熟していない、と言ってしまえばそれまでであるが、このような状況も或る意味では致し方ない。もしドイツ文学史を文芸思潮の消長、継起において捉えるなら、ヘーベルはその隙間からこぼれ落ちるのが必定だからである。即ち、彼は「民衆詩人として文芸思潮の外」(Wilpert 288)にある。しかし彼は真の詩人として、決して見落とされることのない独自の光をドイツ文学史において放ち続けてきたのであった。

彼の文学活動は、大きく二つに分類される。一つはドイツ語の方言であるアレマン語による詩集、即ち『アレマン語詩集』(1803年)であり、もう一つは「暦物語」、或はその中の珠玉の作品を集めた『〈ラインの家の友〉の〈宝の小箱〉』(1811年)である。前者は、「ドイツの方言叙情詩が我々に贈ってくれた最も良いものの一つ」(Kully 34)であり、実際それは19世紀の方言文学全般、更にK・グロートの創作にとっても模範となっている。後者について言えば、ヘーベルは「詩的な短編物語の名手」であり、「短い散文の重要な芸術家」(Martini 345)というような評価が一般的である。それでは、この両者はどのように関係するのであろうか。結局後者は前者に包摂される、と見なすべきであろう。ハイデッガーの言葉を借りると、「宝の小箱の秘密は、ヘーベルがアレマン語という言語を文章語の中に取り入れ、後者——文章語——を、前者——方言——の純粹な反響として響き出させることができた」ということであり、「ヘーベルは『アレマン語詩集』を『宝の小箱』へ止揚した」ということなのである。このハイデッガーの発言からも察せら

れるように、L・クローマーのアレマン語詩の一節¹がハイデッガー全集第13巻『思惟の経験から』の巻頭を飾っていることは極めて意味深長である。そこでこの小文では、アレマン語に照明をあて、ヘーベルの作品、或はハイデッガーのヘーベル論の理解を助ける事柄を私見を交えて幾つか書き記していきたい。

1.

日本語に表わすことは困難であるが、重要なアレマン語の特質を二つだけに限って挙げておく。一つは、アレマン語においては縮小語尾(-li)が豊かである、ということである。縮小語尾を名詞に付けると元の名詞より小さいものを表わすが、単に大きさが小さくなるだけではなく、親愛の情が込められることが多い。そればかりか、必ずしも小さくなくてもこの縮小語尾を付けることによって親愛の情が込められる場合がある。ヘーベルのアレマン語詩『夏の夕べ』では、縮小語尾を意識して訳された「頬っぺ、小さな干草の山」以外に、「ハンカチ、雲、花、蜜蜂、甲虫、〔ひと〕しずく、種粒、種子、餌袋、洗濯物、山、蛙」にも原語では縮小語尾が付けられている。この縮小語尾の多用によって「夏の夕べ」という牧歌的・童話的世界が現成するのである。

この縮小語尾を日本語で表現することはほとんど不可能であろう。しかし東北地方の方言における接尾語の「こ」は、或る意味でアレマン語の縮小語尾に類似する用法であると思われる。広辞苑(第二版)では、「ぜに(銭)こ」、「ちゃわん(茶碗)こ」の如き例が載せられている。またハイデッガーが、詩『夏の夕べ』に基づく講演(『言語と故郷』)の際に、その地の方言(低地ドイツ語)での訳詩を配布したという事実を想起したい。これはハイデッガー一窮余の策であるが、彼の鋭い言語感覚を示すものである。このことから、『夏の夕べ』を東北地方の方言等に訳してみることも、決して余興などでは

1 「大地へ播かれたひとつぶの種、／遠つ方へ播かれたひとひらの言の葉、／そのいずれからも汝は収穫するであろう、／時節到来せば、そのいずれからも！」(L・クローマー)

なく、極めて本質に関わることだと筆者には思われるのであるが、如何であろうか。

第二は、アレマン方言の「好音性」(木村寿夫)という響きの良さであるが、ここでは指摘するに留めておく。ともかく、詩、特に方言による詩は音読されることを前提するのである。

またアレマン方言の言葉の意味についても、ハイデッガーの鋭い言語感覚は大いに発揮される。上記の詩におけるSach, weger, lueg等に関する叙述は、彼の面目躍如といった感があるし、幼い頃から慣れ親しんだZit²の語感が彼の後の〈時〉を巡る思惟を引き起した、と言うことも可能なのではなからうか。

2.

ハイデッガーは方言に関連して「言霊」(Sprachgeist)という言葉を使っており、原佑はこれを注釈して、「この語は〈言霊〉と訳されてよく、おそらくこの用語はわが国からの来訪者の影響であろう」³とやっている。確かにドイツ本国の主要な現代のドイツ語辞典を調べてみても、Sprachgeistという見出し語を見つけることはできない。しかしハイデッガー愛用のグリムの辞書にはSprachgeistが見出し語にあり、更にGeistという項においても、「言語の霊」(der Geist der Sprache)という表現とともに、次のような記述が見られる。「〈言語〉は単に、或る与えられた瞬間における或る民族のすべての人に帰属するだけでなく、過去および将来のすべての時代のすべての人に、最も固有の財産として、〈時空を越えた民族の普遍的な精神〉として帰属する。」そして更に「民族の精神 (Volksgeist) と一つのものとしての言霊 (Sprachgeist)」とある⁴。このようなグリムの記述は、日本語の「言霊」においても典型的にあてはまるであろう。万葉集に、「しき島のやまとの国は事霊 (ことだま) のたすくる国ぞ」と言われている通りである。

2 現代ドイツ語のZeit (時)にあたる。

3 原 230頁。

4 Grimm, Bd.4, Abt.1, Teil 2, Sp.2727.

言霊の思想とは、分かりやすく言えば、言語はそれ自身において「霊」或は「生命」を持つのであり、そのような霊によってのみ言語表現も可能となるという思想である。ところでハイデッガーの言語観によれば、言語は情報伝達の手段なのではなく、したがって我々が言語を語るというよりむしろ、「言語が語る」(Die Sprache spricht.)のであった。したがって、たとえ日本人の影響があったとしても、このような言語観の延長上で初めて「言霊」という表現も可能なのであった。またグリムの辞書における〈民族の精神〉と〈言語の霊〉の一性は、ハイデッガーの場合にも該当すると考えてよいであろう。例えば、「故郷としての言語」が講演『言語と故郷』の結論であるが、本質において民族と故郷は同一視し得るからである。

ところで現代においては、言霊という言葉は死語になりつつあるし、長い間方言は蔑視され続けてきた。ハイデッガー的に言えば、現代は言語の本質が見失われる時代であり、言語学による「言語の破壊」が横行する時代でもある。そして言語喪失、或は故郷喪失との関連で、『言語と故郷』では「救うもの」が言及されるのである(全集第13巻195頁)。この「救うもの」は、『技術への問い』では、「集-立」(Ge-stell)という現代における〈有〉との関連で述べられたのであった⁵。

3.

最後にヘーベルその人の本質に迫ってみたい。ヘーベルは実生活では教育者であり、聖職者でもあるが、同時に詩人でもあり、しかもこの三つのいずれにおいても一流である。しかしこの三つの側面は、彼の内では渾然一体となって彼の本質を成している、と言うべきであろう。このことは彼の作品にも現われ、「戯れと教訓」或は「敬虔さと茶目っ気」(Martini 345)を混ぜる術を彼は心得ており、決して一方に偏することはなかった。このような平衡感覚とも言うべき性向は、ヘーベル理解において特に重要である。

このこととの関連で、ヘーベルの終末論を見てみたい。ヘーベルのアレマ

5 Heidegger S.19.

ン語詩では、『無常』(Vergänglichkeit)においてこの世の終末が扱われている⁶。この詩は、父と幼い息子との対話という設定で進行する。そして父親は息子にこの世のすべては過ぎ去ると諭すが、このことは故郷も例外ではない。バーゼルも何時かは墓の中に沈んでしまうのであり、何時の日か、「視てごらん、あそこにバーゼルが在ったんだよ！ あの塔がかつてペーター教会だったんよ」と言われる日が来る。更に終末には地球は焼き尽くされ、まさに焦土と化す。そしてその時天上の星から地球を見て、息子自身も次のように言うであろうと、父親が語る。「視てごらん、あそこにかつて地球が在ったんだよ。そしてあの山がベルヒェンと謂われたんだ！ そこからあまり遠くない所にかつてヴェストレトが在ったんだよ、そこに僕も暮らしていたんだ、……今は僕あんな所に行きたくないよ。」ここで「視てごらん」(lueg)という言葉は、『言語と故郷』でハイデッガーが注意を促した言葉であった。またベルヒェンとは、ヘーベルが学生時代に友人と共にプロテウス神を礼拝した山である。地上的存在である限り、キリスト教の教会もプロテウス信仰も否定される。ともかく不気味な雰囲気漂い、『夏の夕べ』の牧歌的・童話的な世界とは全く異なる世界である。確かに聖職者的な教訓の意図が背後にあることは見誤り得ないが、キリストの再臨については何ら言及されていない。

故郷とその言葉に対するヘーベルの愛がアレマン語詩になって結晶したと言ってよいが、その故郷も地上的なものである限り否定されるのである。これもヘーベルの平衡感覚と言ってよいであろう。しかしその否定の仕方、その平衡感覚は、変幻自在の神プロテウス以上にプロテウ斯的である。またこの詩ではこの世の無常が強調されるが、ヘーベル自身は決して地上の生を忌み嫌うようなことはなかった。「人生はかくも甘美であるが、かくも制限されている。我々は二度目の人生を望む。——我々はひょっとして既に前世を生きることがあるのであろうか？」(アトランティス出版社版著作集第3巻)⁷ このようなキリスト教の枠を越えた問いも、それに対する答えとと

6 Hebel S.136-145.

7 Vgl. Ruprecht (Hg.) S.47f.

もに、極めてヘーベル的で興味深いものがある。

(ハイデッガーの引用は、脚注に示したもの以外、すべて創文社版ハイデッガー全集第13巻からである。)

(本稿は、1994年9月に印刷されたもの⁸に、若干の手を加えたものである。)

8 創文社『創文』358号(1994年9月)所収。

付録3. ピスカートア聖書における雅歌

第1節 ピスカートアとその聖書

1. 1. ルター聖書とピスカートア聖書

宗教改革渦中の1522年9月に出版されたルターのドイツ語訳新約聖書、所謂九月聖書（Septemberbibel）は、それまでの基準的な聖書であるラテン語訳聖書（ウルガータ）に代わって、聖書の原語であるヘブル語・ギリシャ語原典から一般民衆の言葉であるドイツ語（正確には東中部ドイツ語方言を基盤としたザクセンの官庁語）に直接翻訳した聖書として、極めて重要な意味を持つ。勿論そのような最初の試みではなかったが、プロテスタントのカトリックからの分離および以後のルター聖書の普及と関連して、聖書翻訳において重要な意味を持つこととなる。1534年には旧約・新約の完訳聖書が出版されたが、後世ルター聖書として一般に流布したのは、ルター生前最後の版である1545年のルター聖書である。このルター聖書（略語LB）は単に聖書翻訳史においてだけではなく、現代標準ドイツ語を形成していくうえでも重要な役割を演じたのである。

スイスでは早くも1522年の12月にルターの翻訳の復刻が始められ、次々と出版された。しかしスイスのドイツ語は上部ドイツ語であり、ルターの用いたドイツ語とは系統が違うため、スイス人が用いない言葉は置き換えられたり、語彙集が付加されたりした。他方、ルターの翻訳がなかなか進捗しなかったこと、また神学的な動機¹もあり、独自の聖書、さしあたりはルターが未翻訳の箇所²の翻訳が求められるようになった²。そのような状況のもとで1529年には、ツヴィングリ等の尽力で、ついに旧新約全聖書が出揃う。

1 例えば、聖餐の神学的解釈に関連した翻訳の相違がある。（Vgl. Quack 47）ルター派とツヴィングリ派の統一を図るために、マールブルクで1929年に会談が持たれたが、聖餐論で意見の一致をみなかった。

2 Quack S.47.

翌1530年には、ルターの完訳聖書よりも早く、最初の1巻本旧新約チューリヒ聖書（略語ZB）が刊行されたのである³。チューリヒ聖書以外にも、ルターの翻訳に刺激されて、宗教改革期には各種の新しい訳が刊行された。

さて1602年から1604年にかけてのピスカートアによる聖書翻訳は、宗教改革期以降で最初の旧新約全聖書の翻訳であり⁴、その意味において注目すべきである。宗教改革期以降ルター派におけるルター聖書の権威は次第に大きくなっていき、新たな聖書翻訳は困難となっていく。このような状況で新しいドイツ語の完訳聖書が改革派の土壌から生まれたことは、大いに納得できるのである。またピスカートア聖書（略語PB）は注釈付きの七部からなる大部の聖書翻訳であり、同じくヘッセン地方の改革派の土壌から生まれた一世紀後のマールブルク聖書やベルレブルク聖書といった注釈付き聖書翻訳の先駆と位置付けることも可能である。

ピスカートア聖書の注釈（解説）では、随所にその訳語がヘブル語では本来どのような意味であるのかが示されている。これは、ヘブル語原典を尊重しようとする態度の表れであり⁵、後のマールブルク聖書、特にベルレブルク聖書の聖書原語の重視と共通する姿勢である。

1.2. ピスカートアとヘルボルンの大学

ピスカートア（Johannes Piscator, 1546-1625）は1546年にシュトラースブルクに生まれ、シュトラースブルク大学、後にテュービンゲン大学で神学を学んだ。1571年からはシュトラースブルクで講義を行なうが、ツヴィングリの教義を導入した嫌疑により1574年にやめさせられる。1574年から1577年にかけてハイデルベルクで教えていたが、ルートヴィヒ六世のもとでのルター派の反動によりハイデルベルクからも放逐される。その後ノイシュタットのギムナジウムで校長代理をしばらく務めたりした後、1584年に、新しく創設されたヘルボルンの大学（die Hohe Schule）の教授となったのである⁶。

3 Quack S.60.

4 Quack S.153.

5 RGG⁴, Bd.1, Sp.1501.

6 Quack S.154.

この大学は法的には正式な大学ではなかったが、古典的な4学部を擁し、実質的には総合大学としての機能を果たしていた⁷。この大学は改革派の精神的中心として1584年に創設され、オランダ、スイス、ハンガリーのプロテスタントの地域と活発な関係を持ち、1584年から1626年が最盛期と見なされる⁸。ビスカートアはオレヴィアーン（C. Olevian）と共に最盛期を代表する人物だったのである。後の有名な教育学者コメニウス（Johann Amos Comenius, 1592-1670）も、神学の勉強と聖職者の職務に対する準備のために、19歳の時の1611年から1613年までここで学んでいる。ビスカートアは、千年王国がまもなくやって来るという信仰によって、コメニウスに大きな影響を与えたのである⁹。

ビスカートアは聖書学の教授で、既に挙げた聖書翻訳は、改革派が信奉される地方で一般的な賛同を得たとは言えないが、スイスのベルンでは1684年から1824年まで公的な聖書とされていたのである¹⁰。本書で用いるビスカートア聖書も、1684年にベルンで復刻されたものである。恐らく公的聖書としての承認と聖書復刻とは密接な関連があるものと思われる。聖書翻訳以外に聖書注解書も有名である。新約の注解書は1589年から1613年にかけて、旧約の注解書は1601年から1617年にかけて刊行されている¹¹。神学的には、キリストの受動的従順（*oboeidentia passiva*）¹²のみが人間の罪によって損なわれた神の聖性と名誉を回復充足するという彼のテーゼは、改革派神学において長い論争を引き起こしたのである¹³。

この大学はナポレオン時代の混乱期の1817年に閉鎖されるが、大学の神学部の良き伝統は、現在も福音主義神学校（*evangelisches Seminar*）として引き継がれている¹⁴。

7 Herborn. *Kleiner Führer durch die Altstadt*. S.3f.

8 *ibid.*

9 Dieterich 20f.

10 RGG⁴, Bd.6, Sp.1361.

11 RGG⁴, Bd.6, Sp.1361.

12 ピリピ書2章8節。

13 RGG⁴, Bd.6, Sp.1361.

14 Herborn. *Kleiner Führer durch die Altstadt*. S.3f.

1. 3. 雅歌の比喩的解釈

ピスカートア聖書の雅歌¹⁵では、標題の「ソロモンの雅歌」(Das Hohelied Salomons)に続いて、雅歌全体の紹介が次のように行なわれる。

この書は、キリストと信者たちの教会との間の愛についての霊的な詩をその内に含んでいる。並びに、この世の生における信仰的状态、教会の徳および欠陥、教会の職務、およびキリストの徳と栄光、信者たちに対するキリストの恩恵について〔の霊的な詩をその内に含んでいる〕。これらすべてが、一つの対話の内にはめ込まれている。即ちその対話の中で、花婿としてのキリストと彼の花嫁としての〈信者たち教会〉が親しく愛らしくお互い語り合うのである。(PB 3, 1258)

ここにはっきり示されているように、ピスカートア聖書における雅歌では、花婿と花嫁の恋愛歌は、キリストと教会の対話の比喩として、教会論的に解釈されるのである¹⁶。

第2節 ピスカートア聖書における雅歌の翻訳と解釈

以下でピスカートア聖書(ドイツ語)の雅歌1-8章をなるべく忠実に日本語に訳出していく。最近は七十人訳(旧約聖書のギリシャ語訳)の日本語訳も刊行されるくらいであるので、このような訳も意味があるであろう。ピスカートアは小活字で原文の意味を補足しているが、これは日本語訳でも小活字にされている。また日本語訳では、小活字で誰が誰に語るのかを示した。これはピスカートアの訳本文ではなく、注釈に記されているのであるが、分かりやすくするために訳に挿入した。また聖書本文で分かりにくい表現が注釈で説明されている場合も、小活字で訳に挿入したことがある。(その場合は、〔注釈： 〕という括弧を用いた。)

15 PB, der 3. Teil, S.1258-S.1268.

16 本書第4章参照。

聖書本文の訳に続いて、ピスカートアの注釈を紹介する。注釈から鉤括弧「 」を用いて引用しながら、彼の比喩的解釈をできる限り分かりやすく再現した。なお、〔 〕は日本語訳者（芝田）の補足説明であり、原文の角括弧は [] で示した。

雅歌第1章

第1章の冒頭に「キリストの花嫁の願い。更に彼女の状態と美しさ」という第1章の題詞が置かれ、次に第1章が要約される¹⁷。その後、雅歌の翻訳と注釈（小活字）が展開される。この構成は、すべての章に共通である。

1. ソロモンの雅歌。

（花嫁）2. 彼が彼の口のキスで私にキスしてくださるように。（花婿に）というのは、あなたとの愛の営み¹⁸は葡萄酒を飲むことより愛らしいからです。3. あなたの良き匂いの香油に喩えれば¹⁹、あなたの名は注ぎ出された香油です。それ故におとめたち²⁰はあなたを愛するのです。4. 私を引いて行ってください。私たちはあなたの後を走っていきます。王さまが私をご自分の部屋に導かれたならば、私たちは喜んで跳ね、あなたを喜ぶでしょう。私たちはあなたとの愛の営みを思い出すでしょう、葡萄酒を飲むことよりも。敬虔な者たちはあなたを愛します。（彼女の遊び友だちに）5. 私は黒いが愛らしい、おまえたちエルサレムの娘たちよ。私はケダルの天幕、ソロ

17 注釈と重複するので2章以下では省略するが、1章の要約だけは以下に訳出しておく。「1. キリストの花嫁 [即ち、キリスト教会、或は信者たちの共同体] は、婚姻の同棲によって彼女の花婿から喜びを与えられることを望む。2. その後彼女は信仰弱者たちに、彼女の悲惨な状態と欠陥の故に彼らが躓かないように警告する。3. それから彼女と花婿の間の会話が続く。その会話の中で、彼女〔花嫁〕が彼〔花婿〕をどこで見出すかを、彼女は彼に教えられるのである。その後で彼らはお互いを賞賛し合う。」

18 ルター訳では「あなたの乳房」。ルター訳は、七十人訳μαστοίに対応。（PB: mit dir der liebe pflegen. LB: deine Brüste. ZB: din Brust (sg.))

19 ルター訳では、「あなたの良き香油の香りがするように。」（PB: Belangend den geruch deiner wolriechenden salben. LB: Das man deine gute Salbe rieche.）

20 PB: die jungfrauen. LB: die Megde. ZB: die meytlin.

モンの絨毯のようです。6. わたしが黒いからといって、太陽が私を見つめた²¹[注釈：焼いた] からといって、私を見つめないで。私の母の子供たちが私に怒り、私を葡萄園の女番人にしたの。そしてその間私は私が持っている私の葡萄園を守りませんでした。(花婿に) 7. 私に教えてください、私の魂の愛するあなたよ、どこであなたは放牧しているのですか、どこであなたはあなたの家畜の群れを真昼に休ませているのですか。何故に私は、わきへ退く女のように、あなたの仲間たちの畜群のもとにいないからではないのですか。

(花婿) 8. 女たちの中で最も美しい女である君よ、君がそれを知らなければ、羊と山羊の足跡を追って出て行きなさい、そして牧者たちの住まいのそばで君の小山羊を飼いなさい。9. 君、私の恋人よ、私は君をパラオの馬車の馬に喩える。10. 君の頬は愛らしく [耳] 飾りの間にあり、そして君の首は鎖に飾られている。11. 私たちは銀の珠のついた金の留め具を君に作ってあげよう。

(花嫁) 12. 王が食卓についている間、私のナルドは香りを放ちます。13. 私の愛する男性^{ひと}は、私にとって私の乳房の間にある^{もつやく}没薬の小さい束のようです。14. 私の愛する男性^{ひと}は、私にとってエン・ゲディの葡萄園のコフェルの房のようです。

(花婿) 15. 見よ、君、私の恋人、君は美しい。見よ、君は美しい。君の目は鳩の目のようだ。

(花嫁) 16. 見て、あなた、私の愛する男性^{ひと}、あなたは美しく、そしてまた愛らしい。私たちの寝床も緑をなしています。17. 私たちの家の梁はレバノン杉で、私たちの廊下は樅です。

第1章の解説

1節の「雅歌」(das Hohelied) とは、「すぐれた歌」或は「最良の歌」ということで、ヘブル語では「歌のなかの歌」である。2節の前半で花婿のキスを願うのは、「キリストの花嫁」、即ち、「この地上のキリスト教会」であ

21 PB: daß mich die sonne angeschawet. LB: denn die Sonne hat mich so verbrand.

る。このことによって示されるのは、「天で行なわれる結婚式」を花嫁が願っていることである。

2節の後半からは、花嫁が花婿に語る。「あなたとの愛の営み」とは、ヘブル語では、「あなたと肉体関係を持つ」であると説明される。3節の「あなたの名」では、「あなたを認識すること、永遠のいのちとはそのような認識のことである」と解説され、ヨハネ17章3節参照とされる。ヨハネ17章3節では、「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストとを知る（認識する）ことである」と言われている。古代においては、人の名を知るとは、その人を認識することを意味した。したがってキリストという神の名を知るとは神を認識することであり、それは「注ぎ出された香油」のように永遠のいのちを与える、ということなのであろう。3節の「おとめたち」とは「信者たち」のことで、「その各々が謂わばキリスト教会の女友だちであり、遊び友だちである。」4節の「私たち」は、「私」と「私の遊び友だち」、即ちキリスト教会とそれに属する信者である。王である花婿が花嫁と彼女の遊び友だちを「王の部屋へ」（4節）呼ぶが、それは「天へ」ということである。

5節からは花嫁が「彼女の遊び友だち」に語る。5節の後半は、「私はケダル人とソロモンの天幕のように黒い。それは確かに外側は黒く、太陽に焼けているが、内側は富とすばらしい飾りで満ちている。したがって教会は外からは迫害されているが、こころの内側は信仰、神を畏れること、神の愛という聖霊のすばらしい賜物で飾られている」と解釈される。これは6節の一部も含んだ解釈になっている。6節の「太陽が私を見つめた」は太陽が私を「焼いた」ということで、「迫害が私を忌まわしいものにした」とされる。黒くなること、太陽に焼けることが、教会に対する迫害と解釈されている。同じく6節の「私の母の子供たち」とは、「私に生れついた悪しき欲望と悪しき傾向」を意味し、それらが「私を葡萄園〔複数〕の女番人にした」とは、「よその神々に仕え、私の神を捨てる気に私をならせた」ということで、「私の葡萄園〔単数〕を守りませんでした」とは「真の礼拝（神奉仕）を顧みなかった」と解釈される。偶像崇拜へ向かう人間の罪性という視点からの解釈が行なわれている。

7節からは、花嫁が花婿に語る。「わきに退く」とは、「よその神々と姦淫を行なう」ことであり、「あなたの仲間たち」とは、「自分をあなた〔キリスト〕の仲間と称する者たち、つまり偽りの神々」とされる。花嫁は、自分がそのような偶像を崇拜する者ではない、と花婿に向かって言うのである。

8節からは、花婿が答える。8節で花嫁が「最も美しい女」と呼ばれるのは、「信仰、愛、希望などのさまざまな霊的賜物で私〔キリスト〕によって飾られている」からである。「羊と山羊の足跡を追って出て行きなさい」とは、「どのような教会が、私の羊であるという徴を身に帯びているかに注意しなさい」と、解釈される。この徴は「キリストを告白すること」および「キリストを告白する者たちに対する〔キリストの〕愛の表明」でもある。同じく8節の「牧者たち」は、「第一の牧者であるキリストによって家畜の群れを飼うように任命された教師と司牧者のこと、特に預言者と使徒たち」とされる。「子山羊」（8節）は、「神の言葉を学び始めた者たち」で、彼らを飼うように花婿〔キリスト〕は花嫁〔教会〕に命じるのである。「〔パラオの馬車の〕馬」（9節）が「美しく飾られている」ように、花嫁も美しく飾られているが、それは「霊的な賜物」によってである。花嫁を飾る者が11節で「私たち」と複数で表わされるのは、「私〔キリスト〕と父と聖霊」、即ち三位一体の神だからである。

12節からは花嫁が語る。「王が食卓についている」（12節）とは王が「天で支配する」こととされる。ヘブル語では、「王が車座の中に座っている」であるが、「彼が彼と一緒に周りに食卓についている人たちによって殺される」と解釈される。最後の晚餐が念頭におかれているのであろうか。王が天で支配している間、或は王が仲間に殺される間も「私のナルドは香りを放つ」とは、「王の意にかなう良きわざに私はいそしむ」ことである。13節の「没薬」とはよい香りを放つ樹脂のことで、14節の「コフェル」も「その房が愛らしく匂う木」のことである。

15節は花婿が花嫁に語る。「鳩の目のようだ」とは、花嫁の「純潔」を意味する。花嫁の純潔が賞賛されるのである。16節は花嫁が花婿に語る。「私たちの寝床も緑をなす」（16節）は、「私たちは神の言葉の種によって多くの子を生む」というように信仰的に解釈される。それ故に、「教会はすべての

信者の母と呼ばれる。」17節の「私たちの家の梁はレバノン杉」では、「天の私たちの住まいはまったくすばらしい」ことが意味される。

雅歌第2章

第2章の題詞は、「花婿と花嫁の美しさ。彼らの間の愛」である。

(花婿) 1. 私はシャロンの薔薇、そして谷底の百合だ。2. 茨の間の百合のように、私の恋人は娘たちの間にいる。

(花嫁) 3. 林檎の木が野生の木々の間にあるように、私の愛する男性も息子たちの間におられます。私は彼の蔭のもとに座ることを欲しました、そして今そのもとに座っています。彼の果実は私の口²²には甘い。4. 彼は私を葡萄酒の館に導きました、愛〔こそ〕が私に振られる彼の旗です。(花嫁が彼女の遊び友だちに) 5. 壘〔注釈：壘の中にある葡萄酒〕で私を元気づけて、私に林檎を振りかけて。というのは、私は愛に病んでいるから。6. 彼の左手が私の頭の下にあり、彼の右手が私を抱えています。7. あなたたち、エルサレムの娘たちよ、ノロジカ、或は野の雌鹿にかけてお願いします、愛の気に入るまで、愛を起したり、覚ましたりしないでください。8. 私の愛する男性^{ひと}の声がします、見て、彼が来られます、彼は山の上を跳び、丘の上を跳ねています。9. 私の愛する男性^{ひと}はノロジカ、或は若い鹿のようです。見て、彼は私たちの壁の後ろに立っています、彼は窓から見えています、格子からのぞいています。10. 私の愛する男性^{ひと}は答え、私に言いました、「立ちなさい、私の恋人よ、私の美しい女性よ、こちらに来なさい。見よ、冬は過ぎ去り、雨もやみ、過ぎていった。12. 花々が大地に現われ、歌の時がやって来た。そして雉鳩^{きじぼと}の声が私たちの大地に聞こえる。13. 無花果^{いちじく}の木に節ができて、葡萄の木に芽²³が出て、香りを放つ。立ちなさい、私の恋人、私の美しい女性^{ひと}、こちらへ来なさい。14. 岩の裂け目で、高き巢穴で持ちこたえる君、私の鳩よ、私に君の姿を見せ、君の声を私に聞かせてください。というのは、君の声は甘美で、君の姿は愛らしいから。」

22 PB: meinem rachen. LB: meiner Kele.

23 PB: haben augen gewonnen. LB: haben augen gewonnen

(花婿が彼の遊び仲間に)²⁴ 15. 私たちのために狐を捕まえてくれ、葡萄園を荒らす小さな狐を。というのは、私たちの葡萄園に芽が出たから。

(花嫁) 16. 私の愛する男性は私のもの、私は彼のもの、彼は百合の間で放牧しています。17. 日が息を吐いて²⁵、蔭が逃げ去るまでに〔注釈：夕方になるまでに〕、引き返してください、私の愛する男性よ、ノロジカのように或は若い鹿のようになってください、境界をなす山々の上で。

第2章の解説

1節からは花婿が語る。「私はシャロンの薔薇」では、「私〔キリスト〕は、はにかむ心と怖れる良心を、私の恵みの愛らしい香りで元気づける」と解説される。2節では、「茨の間の百合のように、私の恋人は娘たちの間にいる」となっているが、ルター聖書では「薔薇」となっている。ヘブル語 *šošanana* は、ルターでは「薔薇」(eine Rose)、ピスカートアでは「百合」(ein lili)と訳されるわけである。(本章「付記」参照のこと。) 2節は、「百合が茨よりもずっと美しく真心があるように、私の花嫁は他のおとめたちよりもずっと美しく真心がある」とされる。即ち、「キリスト教会は、他の宗教を有するすべての他の共同体や社会よりも優れている」のである。

3節からは、花嫁が語る。3節の「私の愛する男性も息子たちの間におられます」において、「息子たち」は「若い遊び友だち」、即ち「神々」で、「キリストはすべての他の神々に凌駕する」のである。キリスト教会は他の宗教団体より優れ(2節)、キリストも他の神々より優れている(3節)ということである。同じく3節の「蔭」とは、「すべての試練に対する守りと庇護」と解釈される。イスラエルの砂漠的風土における「蔭」の役割が信仰的な暗喩として解釈されるのである。また花嫁の口に甘い「彼の果実」(3節)は「聖霊の慰め」とされる。4節の「葡萄酒の館」は「葡萄酒を飲み、食事をとる部屋」であり、花婿が花嫁をそこへ導くとは、「キリストが彼の教会を聖書へ導く」と解釈される。「聖書の中では神の言葉が甘くされており、それに

24 勝浦訳、新共同訳は花嫁の発言となっている。

25 PB: Biß sich der tag erschnaufe / LB: bis der tag küle werde / 勝浦訳は「日が息をして」。パレスティナで午後になって風が吹き始めることを意味する。(勝浦 82頁)

よって心が喜ばされるのである。」ここでは「聖書」が「葡萄酒の館」に、「神の言葉」が「葡萄酒」に喩えられる。同じく4節の「彼の旗」は、「戦の長が兵士たちを軍旗で導くように、それでもって彼〔キリスト〕が私〔花嫁〕を自分のところに召すところの徴」とされるが、花嫁にとってはそのような旗が「愛」なのである。

5節からは、花嫁が「彼女の遊び友だち」に語りかける。5節の「壘」とは「壘の中に入っている葡萄酒」で、それで「私を元気づける」と言われるのは、「教会は、神の言葉の内にはめこまれている約束で、元気づけられることを欲する」からである。ここでは「神の言葉」が「壘」に、「約束」が「葡萄酒」に喩えられている。6節（「彼の左手が私の頭の下にあり、彼の右手が私を抱えています」）は、「キリストが教会を聖霊で慰める」と解釈される。7節（「あなたたち、エルサレムの娘たちよ、ノロジカ、或は野の雌鹿にかけてお願いします、愛の気に入るまで、愛を起したり、覚ましたりしないでください」）では、「天におけるキリストとの同棲によって、止むことのない永続する喜びを持ちたい」という教会の願望が語られるのである。7節の「愛」は、天におけるキリストと教会の愛である。8節では「彼〔花婿〕が来られます」と言われるが、「教会がキリストの到来を期待している」と解説される。キリストの到来の時には、11節にあるように、「この惨めで罪深い生という冬」から「天の喜びと栄光という快い夏」へ教会は移されるのである。8節に戻ると、「私の愛する男性^{おとこ}の声」とは、「キリストの到来についてのキリストの約束」とされる。また「彼は跳ぶ」（8節）とは、「彼は急いでやって来る」ということであり、さらに「彼は確かにやって来て、現われないことはない」と言われる。ここで黙示録22章20節参照とされる。その箇所は次の通りである。「これらのことをあかしするかたが仰せになる、『然り、私はすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、きたりませ。」10節で花嫁に向かって言われる「こちらに来なさい」の「こちら」とは、「天の私〔キリスト〕のところへ」である。11節の「冬」は、「キリストの到来まで続く教会の迫害」も意味する。

12節の「花々が現われる」とは、「春が始まる」ことであるが、春は「天における永遠の喜びの時」と解釈される。「歌の時」（12節）とは春のことであるが、「鳥たちが歌う」時でもある。14節で「私の鳩」と言われるのは、

花嫁が「純潔で純真」だからである。その鳩が「岩の裂け目で、高さ巢穴で持ちこたえる」(14節)とは、「すべての試練に対して神の全能によって護られる」ことと解釈される。14節の「あなた〔花嫁〕の声」とは、「私〔キリスト〕に対する讚美の歌声」であり、「あなた〔花嫁〕の姿」は「私〔キリスト〕の血と私の聖霊によって清められている。」

15節は、花婿が彼の遊び友だちに語る。即ち、「キリストがみ言葉の奉仕者に、異端者或は偽教師を追放するように命じる」のである。「異端者或は偽教師」が、「主の葡萄園、即ちこの地上のキリスト教会を荒らす有害な狐」なのである。16節からは花嫁が語る。「百合の間」とは、「良き香りのする場所」のことであるが、「疲れ果てた魂を元気づける神の言葉が説教される場所」とされる。即ち、教会のことである。

雅歌第3章

第3章の題詞は、「花嫁の願望。彼女と花婿との愛」である。

(花嫁) 1. 私は夜々私の臥所^{ふしど}に私の魂の愛する男性^{おとこ}を探した。私は彼を探したが、彼は見つからなかった。2. そこで私は言った。さあ、私は起きて、町を巡ろう、路地や通りを。私は探そう、私の魂が愛する男性^{おとこ}を。私は彼を探したが、彼は見つからなかった。3. 町を巡る見張りたちが私を見つけた。彼らに私は言った。あなたがたは、私の魂が愛する男性^{おとこ}を見ませんでしたか。4. 私が彼らの前をすこし通り過ぎて行くと、私は、私の魂が愛する男性^{おとこ}を見つけました。私は彼をつかまえて放さなかった、そしてついに彼を私の母の家に、私を身ごもった人の部屋へ連れて行った。5. あなたがた、エルサレムの娘たちよ、ノロジカ、或は野の雌鹿にかけてお願いします、愛の気に入るまで、愛を起したり、覚ましたりしないでください。

(花婿) 6. 荒野を煙の柱のように上って来る女性^{おんな}は誰か、没薬と乳香、いやそれどころか商人の様々な粉を薫らせる女性^{おんな}は。

(花嫁) 7. 見て、ソロモン〔王〕の寢床²⁶の周りに、イスラエルの強き者たちの内の60人の強き者が立っています。8. 彼らはすべて剣を持ち、戦い

26 PB: das bethe. LB: das bette. LB (1964): die Sänfte.

に^た長けています。各々が夜の恐れ^の故に腰に剣を帯びています。9. ソロモン王はご自分のためにレバノンの木で寝台を作られました。10. 彼はその柱を銀で、床を銀で、覆いを緋衣で作られました。その内部はエルサレムの娘たちによって愛らしく織られていました。11. おまえたち、シオンの娘よ、こちらに出て来て、ソロモン王を見なさい。冠をつけておられます。彼の婚礼の日に、彼の心の喜ぶ日に、彼のお母さまが彼におかぶせになった冠を。

第3章の解説

1節からは花嫁が語る。1節は、次のように理解できる。「教会は迫害の夜に祈りによってキリストを探し、けっしてやめることがない。そしてついに彼女〔教会〕は彼を見つける、即ち、彼は彼女を慰め、彼女を助ける。」

6節は花婿が語り、「花嫁の愛らしさ」を誉める。6節は、次のように理解できる。「教会は、実を結ばず良きことを何も為さぬこの世の荒野から立ち昇り、力強い召しによって高められる。そして彼女のわざ、特に敬虔な祈りは、好ましい香りのように、神と彼女の花婿〔キリスト〕のもとへ達する。」祈りによって、教会はこの世を超脱し、天を志向するのである。

7節は次のように解説される。「花嫁は、花婿との床入りの甘美さと悦びとを賞賛する。彼の寝床がわざわざいに対してよく護られ、とても美しく優美である。これによって、教会が天のキリストのもとに持つであろう安心と喜びが理解できる。まさにこのことが、〔聖書における〕天のエルサレムの記述によって理解できるのである。黙示録21章10節以下、22章6節まで。」ここでは「ソロモンの寝床」(7節)が、天或は天のエルサレムの比喩と見なされる。「ソロモン」は「真の平和の王であるキリスト」と解される、即ちソロモンは「キリストの予型」である。そしてソロモンの「冠」によって「キリストの栄光」が写される。「その栄光へとキリストは彼の昇天によって高められ、その栄光を彼は天にあって彼の教会に示すであろう」と言われる。

雅歌第4章

第4章の題詞は、「花嫁の諸々の徳。花婿の愛」である。

(花婿) 1. 見よ、君、私の恋人、君は美しい。見よ、君は美しい。君の目は

お下げ髪の間であって鳩の目のようだ。君の髪は、ギレアドの山〔の草〕を
食い尽くす²⁷雌山羊の群れのようだ。2. 君の齒は、毛を刈られるために
洗い場から上って来た羊の群れのようだ。羊はみな双子を産んで、どれも
不妊ではない。3. 君の唇²⁸は薔薇色の紐のようで、君の話し方は愛らし
い。君の頬は、君のお下げ髪の下であってひとつの柘榴^{まぐろ}の実のようだ。4.
君の首は、壘壁で囲まれたダビデの塔のようだ。そこには千の楯と、英雄た
ちのすべての楯がかけられている。5. 君のふたつの乳房は、百合の間で草
を食^はんでいる二匹の若いノロジカの双子のようだ。6. 日が息を吐き²⁹、
蔭が逃げ去るまで〔注釈：夕方になるまで〕、私は没薬の山に、乳香の丘に行
こう。7. 君はすべて美しい、私の恋人よ、君には何の欠陥もない。8. 私
とともに来なさい、私の花嫁よ、レバノンから、私とともにレバノンから来
なさい。アマナ山の頂きから、セニルとヘルモン^{ヘルモン}の山々の頂きから、獅子の
住まいから、豹の山々から、こちらの下を見なさい。9. 君は私から心を奪
った、君、私の妹、愛する花嫁よ、君は君の目の一つで、君の首飾りの一つ
で、私から心を奪った。10. おお、君との愛の営みは如何に愛らしいこと
か、君、私の妹、愛する花嫁よ。君との愛の営みは葡萄酒を飲むことよりも
どれほど愛らしいことか。そして君の香油の香りはすべての香料にまさる。
11. 愛する花嫁よ、君の唇は蜜を滴らせる。蜜と乳が君の舌の裏にある。そ
して君の衣服の香りは、レバノンの香りのようだ。12. 私の妹、愛する花嫁
よ、君は閉ざされた園、閉ざされた泉、封印された湧水。君の苗木は木の園
で、そこには柘榴の実や妙なる実。君の苗木はコフェルにナルド。ナルドと
サフラン、菖蒲とシナモン、それに乳香のさまざまな木、さらに没薬とアロ
エ、またすべての最良の香料。

(花嫁) 15. ああ、あなた、園の湧水、レバノンから流れくる生ける水の泉。
北風よ、目覚めておくれ、南風よ、来て、そして私の園に吹いておくれ、香
料が溶けて流れるように、私の愛する男性^{ひと}が彼の庭にやって来て彼の妙なる

27 PB: die da abeetzen [:abweiden] von dem berg Gilead. LB: die beschoren sind
auff dem berge Gilead.

28 PB: deine leftzen. LB: deine Lippen

29 PB: biß sich der tag erschnause / LB: bis der tag küle werde /

実を食べるように。

(花婿) 17. [5章1節]³⁰ 私の妹、愛する花嫁よ、私は私の園にやって来た、私は私の香料とともに私の没薬を摘み、私の蜜とともに私の蜂蜜を食べ、私の乳とともに私の葡萄酒を飲んだ。私の友たちよ、食べよ、おまえたち最愛の女たちよ、飲め、そして酔え。

第4章の解説

第1節からは、キリストが「彼の花嫁、即ち教会の美」を誉める。「君の眼は鳩の眼のようだ」(1節)は、「君は純潔でしとやかである」、即ち、教会が「私〔キリスト〕だけに愛着し、偶像崇拜に用心している」ことを意味する。3節の「君の髪は雌山羊の群れのようだ」は、「君〔教会〕が良きわざで飾られている」ということである。「君の話し方」(3節)とは、「神の言葉を伝えること、即ち神の真理の告白」および「敬虔な祈り」を意味する。6節は次のように解釈される。「この世の夕べが来て、私がおまえを私のところへ導くまで、私は天に昇る。信者たちは自らの祈りを良き香りの没薬と乳香のように日々天に向け、天に昇らせる。天ではおまえのとりなし〔の祈り〕が、私の天の父のもとに留まり続けるであろう。」教会の祈りが没薬と乳香のように天に昇り、天は没薬の山と乳香の丘となるというのである。その天にキリストは夕べ、即ち終末まで留まるのである。7節で花嫁が「美しい」とは、教会が、「すべての罪を赦されること、すべての良きわざに励むことによって、聖にして義である」ことが意味される。8節で花嫁に「来なさい」と言われるが、それは「天の私〔キリスト〕のもとに来なさい」ということなのである。また「アマナ山脈」(8節)は、「約束の地の周りにあり」、したがって「その頂きから約束の地〔カナン〕を見ることができた」のである。したがって、8節は次のように解釈される。「キリストは信者たちに、信仰によって天を見るようにと勧める。即ち、彼らがやがて〔天国に〕入り、〔獅子や豹である〕圧政から救い出されるという希望をもって。」9節の「君

30 角括弧内小活字は、シュトットガルト版ヘブル語聖書による章節。岩波書店版旧約聖書や新共同訳聖書と同じ。

の目の一つで」は、「それによって君が私を君の花婿として見上げる君の信仰でもって」と説明され、「君の首飾りの一つで」は、「君を飾るところの良きわざへの君の熱心によって」と解釈される。10節の「君との愛の営み」は、ヘブル語では「君との肉体的関係を持つ」ということであるが、「私〔キリスト〕に対する君の愛を感じる」ということなのである。「この愛」は、「私たちがキリストの心である誠めを守ること」にある。(第1ヨハネ2章3-5節参照とされる。) 同じく10節で、君の香油の「香り」とは、「君の良きわざ」のことである。12節の「閉ざされた園」とは、「野生の動物、即ち圧制から隠し護られるように、神から庇護されている」と解釈される。同じく12節の「君の苗木」も「信者たち」が意味される。

15節では花嫁が花婿を誉める、それは「彼女が彼からすべての良きものを受取った」からである。「園の湧水」(15節)で意味されているのは、「それによってすべてのキリスト教会が灌水される」、即ち、「良きわざにおいて実りを結び、すばらしいものとされる」ということである。「園の湧水」は「生ける水の泉」(15節)と言い換えられるが、「生ける水」とは「渴いた心を元気づける新鮮な水」、即ち、「聖霊」のことであり、「キリストがそれを彼の信者たちの心に送るのである。」(ヨハネ4章10節、14節、同じく7章38、39節参照とされる。) 16節の「北風よ、目覚めておくれ」以下で意味されるのは、「聖霊よ、来たり給え、そして私たちの心に吹きつけよ、その結果、神と隣人を愛すことによって心が愛らしい香りを発するように」ということである。この解釈は、霊を意味するギリシャ語のπνεῦμαが、元来は風という意味であることに基づいている。また「私は私の園にやって来た」(17節〔5章1節〕)以下で、花婿が花嫁の先の頼みに対して答えている。「キリストは既に天に昇り、そこで彼の友たちや聖なる天使たちや魂たちとともに喜んでいることを、キリストは示している。このように示されることによって、教会は彼を求めるようになる。」しかし、「教会は肉の安心の内に眠り込んでしまった。このことをキリストは10人のおとめの例で示している」というのである。「10人のおとめの例」については、マタイ25章5節参照とされる。「肉の安心」は5章1節〔5章2節〕の解説に続く。

雅歌第5章

第5章の題詞は、「花嫁の嘆き。更に花婿に対する彼女の愛。」

(花嫁) 1. [2節] 私は眠っていたが、私の心は覚めていた。その時私の愛する男性の^{ひと}声^{こゑ}がした。彼は〔戸を〕叩いて言う、「戸を開けてくれ、私の妹、私の恋人、私の鳩、私の敬虔な女性^{ひと}よ。というのは、私の頭は露に満ち、私の髪の毛は夜の雫で満ちているから。」 2. [3節] そこで私は語った、私は私の衣服を脱いだのに、どうして再びそれを着れようか。私は私の足を洗ったのに、どうして再び汚せようか。 3. [4節] しかし、私の愛する男性^{ひと}は彼の手を〔注釈：錠の〕穴に差し込んだ、それで私ののはらわたは彼の故に揺れ動いた。 4. [5節] そこで私は立ち上がり、私の愛する男性^{ひと}のために〔戸を〕開いた。私の両手は没薬を滴らせ、私の指は流れる没薬を滴らせた、そしてそれは錠の取っ手に付いた。 5. [6節] 私は私の愛する男性^{ひと}のために開いたが、私の愛する男性^{ひと}は背を向けて去ってしまった。そして彼の話し方の故に私は気を失った。私は彼を探したが、彼は見つからなかった。私は彼を呼んだが、彼は私に答えなかった。 6. [7節] 町を巡る見張りたちが私を見つけ、彼らは私を打ち、私を傷つけた。城壁の上の見張りたちは私から私のパールを取り去った。 7. [8節] あなたたち、エルサレムの娘たちよ、私はあなたたちにお願ひします、もしあなたたちが私の愛する男性^{ひと}を見つけたら、彼に教えてあげてください、私が愛の故に病んでいると。

(花嫁の遊び友だち：エルサレムの娘たち) 8. [9節] あなたの愛する男性^{ひと}は他の恋人よりも何のまさるところがあるのですか、女性の中で最も美しい女性^{ひと}よ。あなたの愛する男性^{ひと}は他の恋人よりも何のまさるところがあつて、このようにあなたは私たちに願つたのですか。

(花嫁) 9. [10節] 私の愛する男性^{ひと}は白くて赤く、万人よりも優れています。 10. [11節] 彼の頭は貴重な金のように、完全に精錬された金のように。彼の髪の毛は巻毛で、烏のように黒い。 11. [12節] 彼の目は小川のほりにいる鳩のように、乳で洗われて、絶妙に嵌め込まれています。 12. [13節] 彼の頬は香料園のように、香料の塔のように。彼の唇は百合のように、流れる没薬を滴らせています。 13. [14節] 彼の手はトルコ球をちりばめた黄金の輪のように。彼の腹はサファイアで覆われた輝く象牙のように。

14. [15節] 彼の腿は黄金の脚の上に建てられた大理石の柱のようです。彼の姿はレバノンのようで、レバノン杉のように選り抜きです。15. [16節] 彼の口はとても甘く、彼のすべてがとても愛らしい。私の愛する男性はそのような男性です、そうです、私の恋人はそのような男性です、あなたたち、エルサレムの娘たちよ。

(花嫁の遊び友だち：エルサレムの娘たち) 16. [6章1節] 一体あなたの愛する男性はどこへ行ったの、あなた女のなかで最も美しい女性よ。あなたの愛する男性はどこへ向かったの。私たちはあなたと一緒に彼を探しましょう。

(花嫁) 17. [6章2節] 私の愛する男性は彼の園へ、香料園へ降りていきました、園で放牧し、百合を摘むために。18. [6章3節] 私は私の愛する男性のもの、私の愛する男性は私のもの、彼は百合の間で放牧しています。

第5章の解説

1節〔2節〕では花嫁が語っているが、信者たちが「肉の安心において眠り込んでしまった」と告白しているのである。「私の心は覚めている」(1節〔2節])とは、それにもかかわらず、花嫁が「花婿を求めている」ことを意味する。「〔戸を〕叩く」(1節〔2節])とは、花婿が「私〔花嫁〕に良くなることを促す」ということである。また「敬虔な」(1節)と訳された元のヘブル語は、「完全な」という意味であることが記される。「私の頭は露で満ちている」(1節〔2節])とは、「私はあなたのためにおおいに不快をこうむった」ということで、このことで示されるのは、「キリストが教会、即ち信者たちの教団のためにおおいに苦しまれた」ということである。

2節〔3節〕では、「花嫁は花婿に〔戸を〕開けることを拒否する。」したがって、「このように選ばれた者たちも、福音を受け入れ、福音を証しすることを、さまざまの不快の故にしばしば拒否する」のである。しかし、「花婿はあえて開こうとした」。このことで示されているのは、「選ばれた者たちもすぐには従おうとはしないが、キリストは彼らのもてで促し続ける」ということである。「私のはらわたが揺れ動いた」(3節〔4節])のは、「非常に熱心に私を求めるキリストに対する愛の故」である。5節〔6節〕で花婿が「去ってしまった」と言われるが、それは、「キリストは天に昇ってしまった」

ことを意味する。「彼の話し方の故に」とは、「彼は非常に親しく優美に私と語ったので」ということである。「見張りが私を傷つけた」（6節〔7節〕）とは、「私が私の花婿を告白したので、彼らは私を迫害した」ということである。

8節で語るのは、「花嫁の遊び友だち」、即ち、「キリストをまだ十分知らないなりたての信者」である。彼女たちは、キリストが何故そんなにすばらしいのか、まだよく分からないのである。9節では、花嫁が彼女の遊び友だちに答え、花婿を誉める。

16節〔6章1節〕では、遊び友だちが花嫁に語る。17節〔6章2節〕では、注釈では記されていないが、明らかに花嫁が語っている。「私の愛する^{ひと}男性は彼の園へ降りていきました」（17節〔6章1節〕）とは、「キリストが天に昇った」ことを意味する。

雅歌第6章

雅歌6章の題詞は、「花嫁の美しさ。婚礼の約束」である。

(花嫁) 1.〔4節〕私の恋人よ、君はティルツァ³¹のように美しい、エルサレムのように愛らしい。軍旗を持った軍勢のように恐ろしい。2.〔5節〕[君の眼を私からそらしておくれ、君の眼は私をあつかましくさせるから。]君の髪は、ギレアドの山〔の草〕を食い尽くす雌山羊の群れのような。3.〔6節〕君の歯は毛を刈られるために洗い場から上って来た羊の群れのような。羊はみな双子を産んで、どれも不妊ではない。4.〔7節〕君の頬は君のお下げ髪の下にあってひとつの^{ざくろ}石榴の実のような。5.〔8節〕王妃は60人、側室は80人、おとめたち³²は数えきれない。6.〔9節〕しかし彼女だけが私の鳩、私の敬虔な^{ひと}女性³³である。彼女は彼女の母のひとり娘、彼女を産んだ女性の選り抜き娘。娘たちは彼女を見て、彼女を^{しあわせ}至福だと誉めたたえる。同じように王妃たちや側室たちも彼女を誉めて言う、7.〔10節〕「曙のようにのぞき見るこの^{ひと}女性、月のように美しく、太陽のように純粋で、軍旗

31 オムリ王が都をサマリアに移すまで、北王国の首都であった。(勝村 46頁)

32 PB: der jungfrauen (*gen.*). LB: Jungfrauen.

33 PB: meine fromme. LB: mein Frome.

を持った軍勢のように恐ろしいこの女性^{ひと}は誰か。」8.〔11節〕私は胡桃の園におりて行った、谷の実を見るために、葡萄の木が咲いているか、柘榴の木が芽を出したか、を見るために。9.〔12節〕私が気付かないうちに、私の魂は私を私の自由意志の民³⁴の車に座らせた。そして私は言った、10.〔7章1節〕帰れ、帰れ、シュラムの女よ、帰れ、帰れ、私たちがあなたを見るように。(花婿が彼の友たちに)あなたがたはシュラムの女の何を見るのか。(彼の友たち)私たちは謂わば二つの陣営の輪舞を見ます。

第6章の解説

6章は花婿が語っている。1節〔4節〕では花婿が花嫁を誉めるが、「キリストの花嫁の美しさは、罪の赦し、聖霊による刷新にある。」(エペソ書5章25-27節参照、とされる。)5節〔8節〕では、「花婿〔つまりキリスト〕が、彼の予型であるソロモンという人において語る。」ここから分かるのは、「ソロモンが彼の王国の最初の何年かにこの歌を書いたということである。その時彼はまだそれ以後ほど多くの妻や側室を持っていなかった。後には彼は600人の妻と300人の側室を持っていたのである。」6節〔9節〕で花嫁を誉める「娘たち」とは、「〔ソロモンの〕妻たち、或はおとめたち」である

8節〔11節〕で、「何故キリストが天に昇ったか」をキリストが示す。「つまり、天で彼の花嫁のための場所を準備するためである。ヨハネ14章2節。」9節〔12節〕では、「キリストがまもなく再びやってくる、彼の花嫁を自分のところへ連れてゆくこと」をキリストが示している。「私の魂が私を私の自由意志の民の車に座らせた」(9節〔12節])とは、「私〔キリスト〕は大なる欲求をもって雲の上に座る」と解説される。ここで「私の自由意志の民」とは、「私〔キリスト〕に自由意志で仕える天使たち」(詩篇103篇20節参照)を意味し、「車」は「雲」のことで、それを「天使たちが私に準備した」のであった。(マタイ24章30節および25章31節を参照せよ、とされる。)

10節〔7章1節〕の「帰れ」とは、「こちらへ来い」ということで、「キリストが彼の花嫁に、彼が彼女を自分の天へ連れていくと、呼びかける」ので

34 PB: meines freywilligen volcks (*gen.*). LB: AmiNadib.

ある。「シユラムの女よ、帰れ、帰れ、私たちがあなたを見るように」（10節〔7章1節〕）において、「シユラムの女」とは、「完全なものにされた女性、即ち、私によって完全な聖性を与えられている女性」を意味する。また「私たち」とは、「私〔キリスト〕と私の友たち、即ち私の傍にいる召使、つまり聖なる天使たち」を意味する。「二つの陣営の輪舞」（10節〔7章1節〕）において、「輪舞」で示されているのは、「信者たちが小躍りして喜ぶこと」である。「その時彼らはキリストのもとに集まるのである。」また「二つの陣営」とは、「お互い向かい合って立ち、代わるがわる救済と勝利に対して神に讚美の歌を歌う」ことである。これは、「モーセの時代に、エジプト人たちが紅海で溺死した後に」行なわれるようになった。二つの陣営によって「多くの信者」が暗示されている。

雅歌第7章

7章の題詞は、「花嫁の美しさ。および彼女が小躍りして喜び、親しく申し出ること。」

（花婿）1.〔2節〕靴をはいた君の歩みはなんと美しいことか、君、王侯の娘³⁵よ。君の腰の帯は、技にたけた名匠の手になる首飾りのようだ。2.〔3節〕君の臍は、飲物〔注釈：水で割った葡萄酒〕がけっして尽きることのない丸い杯のようだ。君の腹は、百合で周りをめぐらされた小麦の山のようだ。3.〔4節〕君の二つの乳房は、二匹の若いノロジカの双子のようだ。4.〔5節〕君の首は象牙の塔のようだ。君の目は、民の群がる門のそばにある美しき池のようだ。君の鼻は、ダマスコの方を見ているレバノンの塔のようだ。5.〔6節〕君の頭は君の上であって、カルメル山のようだ。君の頭の髪帯³⁶は、緋色のようだ。王は廊下に縛りつけられる。6.〔7節〕君はなんと美しく愛らしいことか、私の最愛の女性^{ひと}、喜悦の女性^{ひと}よ。7.〔8節〕君のこの立ち姿は、椰子^{やし}の木^しのようだ。君の乳房は葡萄の房のようだ。

35 PB: Fürsten tochter. LB: Fürsten tochter.

36 「髪帯」は、das haarband（ヘアバンド）である。この前後では花嫁の身体の特徴が讚美されているので、花嫁の髪^のの比喩と解することができる。勝村訳（勝村50頁）参照。

8. [9節] 私は語った、椰子の木の上に登り、その小枝を掴みたい、と。むしろ今や、君の乳房を葡萄の房のように、君の鼻 [即ち息] の香りをリングのようにしてくれ。9. [10節] 君の口を良き葡萄酒のようにしてくれ、葡萄酒はとても愛らしくそしてまっすぐに流れ来て、眠っている女性の唇を語らせる。

(花嫁) 10. [11節] 私は私の愛する男性のもの、彼の欲求は私に傾く。11. [12節] 来てください、私の愛する男性、私たちは野原に出て行きましょう、コフェルの下に夜のあいだ留まりましょう。12. [13節] その後私たちは早く起き、葡萄園へ行き、見ましょう、葡萄の木が咲いているか、その芽が開いたかどうか³⁷、柘榴の木が芽を出したかどうかを。そこで私はあなたに私と愛の営みをさせてあげたい。13. [14節] 愛らしい木々は香りを放ち、さまざまな極上の実が、今年の実も古い実も両方とも³⁸、私たちの戸の前にあります。これを私はあなたのために取っておきました、あなた、私の愛する男性よ。

第7章の解説

1節 [2節] で、花婿は再び花嫁を「彼女の美しさの故に」誉める。「王侯の娘」(1節 [2節]) については、「信者たちの教会が、最高の王侯の娘、つまり神の娘である。ヨハネ1章12節を見よ」と解説される。4節の「民の群がる門」とは、「多くの人が集まる場所」である。5節 [6節] の「王は廊下に縛りつけられる」については、次のように解説される。「彼は廊下を通して部屋を次から次へと巡ろうとし、その際に彼女を見つける。その時彼は彼女をじっと見るために立ち止まらなくてはならない。彼はまさに廊下に縛りつけられるかの如くである。」6節 [7節] の「私の最愛の女性」は、ヘブル語では、「あなた、愛よ」であることが記される³⁹。「彼は花嫁を愛そ

37 PB: ob der weinstock blühe: ob seine augen aufgesprungen seyen / LB: ob der Weinstock blühet vnd augen gewonnen habe /

38 PB: beydes heurige und firne. LB: beide heurige vnd fernige.

39 ルター聖書では、「愛」(Liebe) と直訳される。(PB: mein allerliebste. ZB: allerliepste. LB: Liebe.)

のものと呼んでいる」のであり、「彼が彼女を非常に愛している」ことを示している。9節〔10節〕の「眠っている女性^{ひと}の唇を語らせる」における「語らせる」とは、「元気にし、朗らかにする」という意味であり、葡萄酒の効用を言っているのである。

雅歌第8章

8章の題詞は、「旧約における花嫁の願い。彼女のキリストに対する愛、キリストの葡萄園。花嫁の頼み」である。

(花嫁) 1. あなたが、私の母の乳房を吸った私の兄弟になってくれたら。その時には、私があなたを外で見つけたら、私はあなたにキスをしたい。誰もそのことの故に私を嘲ったりしないでしょ。2. 私はあなたを導き、あなたを私の母の家に連れて行きたい。彼女は私に教えてくれるでしょう。そして私はあなたに芳香葡萄酒、それに私の柘榴を絞った汁を飲物としてあげたい。3. 彼の左手が私の頭の下にあり、彼の右手が私を抱えています。4. あなたがたにお願いします、エルサレムの娘たちよ、愛の気に入るまで、愛を起したり、覚ましたりしないでください。5. (花婿が花嫁について) 荒野から上って来る女性^{ひと}は誰か、彼女の愛する男性^{ひと}の道連れになる女性^{ひと}は誰か。

(花嫁が花婿に) リングの木の下で、私はあなたを目覚めさせました。そこであなたのお母さまがあなたを産み、あなたを産まれた女性^{ひと}があなたをお産みになりました。6. 私を印章のようにあなたの心臓の上においてください、そして印章のようにあなたの腕の上に。というのは、愛は死のように強く、熱情は墓のように冷酷だからです。その灼熱は火の灼熱で、主の炎です。7. 大量の水もこの愛を消すことはできず、大河もその上をおおう〔注釈：それを溺れさす〕ことはできません。もし或る人が愛を求めて彼の家の全財産を与えようとするなら、彼はまったく軽蔑されるでしょう。(花嫁〔古い教会〕が妹〔新しい教会〕を心配する) 8. 私たちには妹がいます、彼女は小さく、まだ乳房もない。私たちの妹に何をしてあげようか、彼女について語られ

る⁴⁰[注釈：彼女を嫁がせる]日には。

(花婿) 9. 彼女が城壁ならば、私たちはその上に銀の城を建てよう。しかし彼女が戸ならば、私たちはレバノン杉の板で堅固にしよう。

(花嫁〔古い教会]) 10. 私は城壁で、私の乳房は塔のようです。(花嫁が彼女の遊び友だちに) その時彼の目には、私は平和を見出す女のようにになりました。

(花婿) 11. ソロモンはバアル・ハモンに葡萄園を持っていた。彼はその葡萄園を見張りたちに任せ、〔見張りたちの〕各々はその実に代えて銀千シケルを納める。12. しかし、私の持っている私の葡萄園、それは私の前にある。ソロモンよ、千〔注釈：銀千シケル〕をあなたのものにしなさい、しかしあなたは実を見張る者たちに二百を与えなければならない。

(花婿が花嫁に) 13. 園の中に住んでいる女性よ、私の仲間たちが君の声に耳を傾ける⁴¹。私に君の声を聞かせてくれ。

(花嫁) 14. 急いで来てください、私の愛する男性よ、芳香の山々の上で持ちこたえるノロジカのように、或は若い鹿のようになってください。

第8章の解説

1節では、花嫁が花婿に語る。1節では、「ユダヤ人の教会が心からキリストの最初の到来を願った」とされる。したがって「私の母の乳房を吸った私の兄弟になる」(1節)とは、ダビデの子孫、ユダヤ人として神が受肉することを意味することになる。受肉を願うことが、8章の題詞の「旧約における花嫁の願い」にあたるのである。3節では、「ユダヤ人教会がキリストの最初の到来を誉め、それが彼女にとって如何に好ましいものかを示している。」6節の「主の炎」とは、「極めて大きい栄光の炎」を意味する。7節の何ものも消すことのできない「この愛」とは、「それで教会が彼女の花婿であるキリストを愛する」愛である。8節では、「古い教会が、新しい教会、即ち、最初のキリストの到来の後に異教徒から召される新しい教会のことを

40 PB: an dem tage / da man von ihr reden wird? LB: wenn man sie nu soll anreden.
ヘブル語原典: bajjom šejjedubbal-bah. bahをピスカートアはvon ihrと訳しているわけである。

41 PB: mercken auf deine stimm. LB: mercken drauff.

心配する。古い教会はキリストに尋ねる、彼が何をしようとするのか、そして新しい教会が天に連れていかれるために、彼女が何をすべきであるのかを。」幼い「妹」とは、新しい教会のことである。8節の妹が「小さい」とは、「まだ彼女が嫁ぐ時ではない」、即ち、「異教徒が教会へ召される時はまだきていない」ことを意味する。「彼女について語られる」とは、「彼女を嫁がせる」ことで、「異教徒が福音によって召される」ことを意味する。

9節では、「花婿が答えて約束する、彼が新しい教会を彼の聖霊で強めて飾ると。」9節の「彼女が城壁である」とは、「私〔キリスト〕に対する信仰において彼女は堅固となる」という意味である。「私たちはレバノン杉の板で堅固にしよう」（9節）における「私たち」とは、「私〔キリスト〕と父と聖霊。」或は「私とあなた、即ち私〔キリスト〕は聖霊の内的な働きと力によって、しかしあなた〔教会〕は外的にみ言葉の説教と聖なる秘蹟の授与によって」とも解説される。「彼女が戸ならば」（9節）で暗示されるのは、「戸が城壁ほど強くないように、信者たちは信仰において同じ強さではない。」したがってキリストは信者の信仰に応じて対応するのである。

10節では、「私は城壁で、私の乳房は塔のようです」と花嫁が言うが、これは次のように解釈される。「古い教会は自分の信仰を城壁のように強いと誉める。また選ばれた者たちを教えるのに自分が熱心であることを誉める。つまり彼女は彼らを彼女の乳房で授乳する、即ち神のみ言葉の理性的な乳を食べさせて養うのである。ペテロ前書2章2節。」10節後半の「その時」とは、「私〔古い教会〕が私の信仰と私の職務における私の熱心をこのように誉めた時」ということである。そして「平和を見出す」とは、「花婿が私の信仰と熱心をよしとし、それ故に私に対して平和で満ち足りていた」ことを意味する。

11節で語るのは、花婿、即ちキリストである。「彼は自分の葡萄園〔即ち教会〕とソロモンの葡萄園を、栽培と収益の両方に関して比較する。」そして彼は以下のことを示す。「彼〔キリスト〕はソロモンよりも熱心である。ソロモンは彼の葡萄園の栽培を他の人たちに委ねたが、キリストは彼の葡萄園を自分自身のために持つ、即ち、彼は自らそれを栽培するからである。したがって、ソロモンは自分の葡萄園の実を全部はもらえず、葡萄園の見張り

たちに〔委託料として〕一部を与えなければならない。しかしキリストは自分の葡萄園の実を全部手にするのである。」また「ソロモンよ、千をあなたのものにしなさい」(12節)では、次のように解説される。「あなた〔ソロモン〕の葡萄園からの毎年の収入は多いけれども、私はそれをねたまない、と花婿が言っているかの如くである。というのは、私は私の葡萄園〔教会〕からそれ以上の多くの収入を得るからである。」何故なら、「ソロモンは実を見張る者たちに二百を与えなければならない」(12節)からである。それに対して、「私の葡萄園の収入は全部私のものになると、花婿が言っているかの如くである。というのは、名誉はキリストのみにふさわしく、教会を植えて育てるが故に、栄誉が信者たちによって彼に与えられるからである。」

13節の「園の中に住んでいる女性よ、私の仲間たちが君の声に耳を傾ける。私に君の声を聞かせてくれ」において、「キリストが教会に彼の名を告白するように促す。それ〔彼の名の告白〕は彼と聖なる天使たちにとってとても快い」と解説される。ここで「園の中」とは、「神の言葉が伝えられるさまざまな世界の場所」ということである。また「私の仲間たち」とは「父と聖霊」とされ、「君の声に耳を傾ける」では、その声で「君〔教会〕は私〔キリスト〕に呼びかけ、私の到来を求める」と解されるのである。

14節の「急いで来てください」とは、「花婿であるキリストがすぐに来てくれるように、教会が頼むのである。」確かに「古い教会〔ユダヤ教会〕は彼がすぐに受肉してくれるように頼むのであるが、新しい教会は彼が最終的な救済のためにすぐに来てくれるように頼むのである。」花嫁が新しい教会〔キリスト教会〕の場合は、キリストの再臨という終末論的な視点から解釈されるのである。また「芳香の山々の上でノロジカのように、或は若い鹿のようになってください」(14節)において、「芳香の山々の上」とは「天」を意味する。したがって、再臨の直前の天におけるキリストの様子が描かれているのである。

第3節 ピスカートア聖書の雅歌の特質

3.1. ピスカートアの雅歌解釈における「天」

花婿と花嫁の関係はピスカートアの解釈ではキリストと教会の関係であり、その際に鍵語となってピスカートアの解釈を貫いているのが「天」である。即ち、①キリストはかつて天から地上にやって来たが、②受難・復活の後に再び天に帰り、③今は天にあるということ。更に、④終末において再び天からこの世にやって来て、⑤花嫁である教会を天に連れて帰り、⑥天において花婿と花嫁の真の合一が成就される、のである。したがってキリストと教会の関係が花婿と花嫁の関係として解釈されるが、地上における両者の関係は天における両者の関係の謂わば雛型にすぎない。このことが雅歌1章2節の注釈（解説）で、花嫁が「天で行なわれる結婚式」を願っているという表現に端的に示されている。

上で①から⑥に分類された「天」に関連する比喩的解釈を見ていきたい。

①キリストの受肉、ないし最初の到来。

ユダヤ教会は、8章1節および14節ではキリスト〔メシア〕の到来を願い、また8章3節ではキリストの到来を賞賛している。

②キリストの昇天。

4章6節の「私は没薬の山に、乳香の丘に行こう」、4章17節〔5章1節〕の「私は私の園にやって来た」、5章5節〔6節〕の「〔花婿は〕去ってしまった」、5章17節〔6章2節〕の「彼の園へ降りて行きました」、および6章8節〔11節〕の「私は胡桃の園におりて行った」は、キリストが天に昇る、と解釈される。6章8節〔11節〕ではヨハネ14章2節と関連させて、キリストが昇天したのは、「天で彼の花嫁のための場所を準備するため」であると解説されていることも見逃してはならない。また3章7節の解説では、キリストは昇天によって栄光へと高められる、と言われている。

③再臨までのキリストの天での支配。

1章12節では、「天で支配する」と解説される。3章7節では、キリストは天にあって栄光を教会に示すと言われ、5章8節〔9節〕では、キリストが信者たちに「天を見る」ように勧めている。また8章14節では、再臨の直

前における天（「芳香の山々」）でのキリストの様子が描写されている、と言ってよい。

この時期は、キリストは天に、信者は地上に、というように両者は離れているので、信者の祈りが天に向けられる。この天への祈りが、3章6節および4章6節において、「没薬と乳香」の香りが立ちのぼることによって喩えられている。そして天は祈りによって「没薬の山、乳香の丘」となるのである（4章6節）。

④キリストの再臨。

2章8節の「私の愛する^{ひと}男性の声」は、「キリストの到来についてのキリストの約束」とされ、同じ箇所「彼は跳ぶ」は、「彼〔キリスト〕は急いでやって来る」とされる。6章9節〔12節〕では、「キリストがまもなく再びやって来る」と解説されている。8章13節の「君の声」においては、その声で「君〔教会〕は私〔キリスト〕に呼びかけ、私の到来を求める」とされる。2章8節と同じく、「声」がキリストの再臨と関連づけられるのである。8章14節の「急いで来てください」では、キリスト教会が「最終的な救済のためにすぐ来てくれるように」とキリストに頼むのである。

⑤キリストが花嫁を天に導く、或は花嫁が天に行くこと。

1章4節の「王の部屋へ」行くとは、花嫁が「天へ」行くことなのである。2章10節の「こちらへ来なさい」とは、「天の私〔キリスト〕のところへ」であり、4章8節で花嫁に「来なさい」と言われるのも同様である。4章6節の解説では「私〔キリスト〕がおまえを私のところ〔天〕へ導く」、4章8節の解説では「彼ら〔信者たち〕がやがて〔天に〕入り」と言われ、6章9節〔12節〕の解説では、「彼の花嫁を自分のところへ連れていく」と言われている。6章10節〔7章1節〕の「帰れ」も、「彼〔キリスト〕が彼女〔花嫁〕を天へ連れていく」ことなのである。8章8節の解説でも、「教会が天へ連れていかれる」という表現が使われている。

⑥天における花嫁。

既に指摘したが、1章2節で「天で行なわれる結婚式」と言われている。1章17節の「私たちの家の梁はレバノン杉」では、天における花婿と花嫁の住まいのすばらしさが描かれる。2章7節では、「天におけるキリストとの

同棲によって、止むことのない永続する喜びを持ちたい」という教会の願望が語られる。また2章11節の「夏」は、「天の喜びと栄光という夏」と解釈され、2章12節の「春」も、「天における永遠の喜びの時」とされている。また3章7節では、「教会が天のキリストのもとに持つであろう安心と喜び」に言及され、ヨハネ黙示録の「天のエルサレム」が援用される。

さて、上のピスカートアの比喩的解釈で注意しておきたいのは、「園」が——それは「葡萄園」⁴²や「没薬の山」、「乳香の丘」、「胡桃の園」、「芳香の山々」であったりするが——、「天」に喩えられている点である。七十人訳聖書ではエデンの園が「パラダイス」(παράδεισος)と訳されており⁴³、このギリシャ語は、もともと果樹園とか庭園という意味を有していたが、ドイツ語(Paradies)等では比喩的に「天国」という意味も持つ(ルター聖書ルカ23章43節参照)。したがって「園」が「天」に喩えられるのは、常套的な比喩と言えるであろう。また園が葡萄園である場合は、葡萄酒の陶酔というイメージによって男女の愛の陶酔も連想されるのである。(なお、ピスカートアの雅歌解釈におけるその他の重要語を註でまとめておく⁴⁴。)

3.2. ルター聖書との関連

ピスカートア聖書は、その正式な標題からも分かるように、ヘブル語およ

42 雅歌2章15節、8章13節では、葡萄園が例外的に「地上のキリスト教会」に喩えられている。

43 Septuaginta, Gen. 2, 8.

44 「迫害」: 1章6節、1章7節、2章11節、3章1節、5章6節〔7節〕。「偶像崇拜」或は「他の神々との姦淫」: 1章6節、1章7節、4章1節。「神のみ言葉」: 1章8節、1章16節、2章4節、2章4節(「聖書」)、2章5節、2章16節、4章3節、8章9節(「み言葉の説教」)、8章10節、8章13節。「聖霊」: 1章5節、2章3節、4章15節、4章16節、6章1節〔4節〕、8章9節。「霊的賜物」1章8節、1章9節。「良きわざ」: 1章12節、4章3節、4章7節、4章9節、4章15節。「信仰」: 1章5節、1章8節、4章8節、4章9節、8章9節、8章10節。「三位一体的解釈」(「私」と「父」と「聖霊」): 1章11節、8章9節、8章13節。「(神ないしキリストの)約束」: 2章5節、2章8節、4章8節。「祈り」: 3章1節、3章6節、4章3節、4章6節。

びギリシャ語原典から直接訳されている。また注釈の多くの箇所ではヘブル語の本来の意味が記載されていることが示しているように、ヘブル語原典を尊重しているが、ヘブル語からの忠実な直訳を必ずしも目指しているわけではない。またピスカートア聖書はルター聖書を参考にして翻訳を遂行したとも思えないが、ルター聖書が影響していると思われる箇所もある。

ピスカートア聖書の雅歌において、ルター聖書の影響が最も顕著に出ていると思われる箇所は、1章4節の「敬虔な者たちはあなたを愛します」(Die frommen lieben dich.)である。これはルター聖書とまったく同じである⁴⁵。「敬虔な者たち」で使われている形容詞はfrommであるが、この言葉をルターは「^{ただ}義しい」という意味で使っている⁴⁶。ピスカートアは、frommと訳した元のヘブル語の意味が「義しい」(richtig)であることを注記しているので、1600年頃にはfrommは「義しい」という語感がかかなり薄れていたものと推測される。それにもかかわらずピスカートアは、あえてルター聖書とまったく同じに訳しているのである。なお、6章6節〔9節〕の「私の敬虔な女性」(meine fromme)もルター聖書と同じ訳である。

その他、「葡萄の木に芽が出る」(1章13節)、「王侯の娘」(7章1節〔2節〕)、「今年の実も古い実も両方とも」(7章13節〔14節〕)等が、ルター聖書との一致が目立つ箇所である。

しかしながら、ルター聖書と同じ訳であることだけをルター聖書の影響とみなすことはできない。例えば、1章2節の「キス」はルター聖書では単数で訳されるが、ピスカートア聖書ではヘブル語に忠実に複数で訳される。この点に関する注釈は次のようになっている。「単に一つのキスではなくて、多くのキスでもって。これでもって信者たちの教会は次のことを望んでいるのである。即ち、キリストが彼らに彼の愛を多様にしかも完全に証明してくれ、彼らにすべての喜びを注ぎかけてくれることを。」(PB 3, 1258)これは「キス」が単数であるか複数であるかによって解釈が異なるという指摘であり、明らかにルター聖書の単数を意識して主張されているものと思われる。

45 LB: Die Frommen lieben dich. PB: Die frommen lieben dich.

46 Vgl. Grimm Bd.4, Ab.1, Teil 1, Sp.241. ルター聖書ではδύκαυοςの訳語。

チューリヒ聖書も単数で訳しているが、ピスカートア聖書の訳し方は「キス」の数以外はルター聖書とまったく同じである⁴⁷。

また7章6節〔7節〕の「私の最愛の女性」で、ヘブル語では「あなた、愛よ」であることが注記される。これもルター聖書が「愛」と直訳しているのを意識しての注釈と思われる⁴⁸。このようにルター聖書との相違が、かえってルター聖書の影響と見なせるような箇所もあるのである。ルター聖書との相違が目立つ箇所として、次の箇所を挙げておく。1章2節の「あなたとの愛の営み」、2章1節、2節および2章16節の「百合」（本章「付記」参照）、6章9節「私の自由意志の民」（本書第4章参照）。

以上のようにルター聖書の若干の影響は認められるが、一般的に言って、ピスカートア聖書はあくまでルター聖書とは別個の（原典からの）聖書翻訳なのである。

付記 ルター聖書（1545年）の雅歌2章2節における「薔薇」

雅歌2章2節でピスカートアが「百合」と訳しているヘブル語 *šošanana* は、ゲゼーニウスのヘブル語辞典によれば、「花の名、普通の解釈によれば百合（Lilie）、しかし恐らく、いくつかの花の種類に対する包括的な名であろう」（Gesenius 817）とされている。ミュラーでは、「ドイツ語の言葉に付着している連想の可能性を顧慮して、百合（Lilie）で訳されている。」（Müller 23f.）したがって「百合」（eine Lilie）と訳される必然性はなく、むしろ学問的には「蓮」の方が正しいと思われる（Müller 24）。しかし翻訳、まして一般人に読まれるべき聖書の翻訳は、単に学問的正確さによってだけで決定されるべきではない。更にこのヘブル語の言葉に関しては、学問的にも決定的なことは言えないように思われるので、やはり「百合」（eine Lilie）と訳す

47 PB: Er küsse mich mit den Küssen seines mundes: . LB: Er küsse mich mit dem Kusse seines Mundes / ZB: das mir dein mund einen kussz gebe /

48 ルター聖書の訳も「愛する女性」と取り得るが、ヘブル語から「愛」と直訳したと取る方が自然であろう。

るのが一番適切であると思われる。実際、改訳ルター聖書でも1964年版からは「百合」(eine Lilie) に変わり、他の現代ドイツ語訳も「百合」(eine Lilie) である。しかし、「百合」と訳すのは実は古い伝統を持っているのである。即ち、ウルガータでも *lilium* (百合) と訳されている。因みに、ドイツ語の *Lilie* という綴りはラテン語 *lilium* に由来している。ルター聖書が原則としてウルガータを参考にしていないとはいえ、ウルガータの伝統を全く無視して、ルターが当該のヘブル語を薔薇 (eine Rose) と訳したことの方が、むしろ謎のように思われる。またギリシャ語 (七十人訳) では κρίνον と訳されており、これは有名なマタイによる福音書 6章28節の「野の百合を見よ」の「百合」と同じギリシャ語であるが、ルターはこのマタイの箇所は *Lilie* (百合) を使って訳しているのであるから、雅歌 2章の「薔薇」という訳はますます不可解となる。

次に、ルター聖書以前に『雅歌』 2章 2節がドイツ語でどのように表現されているかを見てみたい。『雅歌』 2章 2節に依拠したメーゲンベルク (K. v. Megenberg, 1309頃-1374) の文章が、グリムの辞書に載せられている⁴⁹。これは1482年に出版された『自然の書』(buch der natur) に掲載されており、この場合もウルガータの影響が強いと思われるが、少なくともドイツ語でも「百合」と訳されるべき言語的雰囲気のようなものは感じられるであろう。

ルター以降は皮肉にもルター訳が決定的な重みを持つに到る。比較的最近に出たドゥーデンの『引用・名言事典』⁵⁰にも、1545年のルター聖書、即ち「薔薇」(eine Rose) を用いた『雅歌』 2章 2節が掲載されているが、特にルター聖書という断り書きはない。1545年のルター訳が諺として定着しているのである。

ルターが何故「薔薇」という訳語を用いたかを、私自身色々調べてみてやっとなきとめることができた。これは実は詩篇講義にまで遡らなければならない。ルターは1513年にヴィッテンベルク大学で詩篇の講義を始め、その講義のために印刷物を作らせている。そして詩篇第44篇(現行聖書では第45篇)

49 mein lieb oder mein freundinn ist gestalt under andern töhtern, die auf erd sind, sam diu lilig ist gestalt under den dornstauden. (Grimm, Bd.12, Sp.1021)

50 Der Duden in 12 Bänden. Bd.12. S.376.

の標題において、ウルガータで「百合」(pro liliis) となっているところを、ルターは「薔薇」(pro Rosis) と訳している。そしてこの翻訳の相違について、注釈で次のように述べている。

薔薇、或は百合、何故ならヘブル語でソサニム〔複数形〕と謂われているから。そこからスサンナとスーサとなる。これはキリストと教会を意味する、それらについては雅歌で次のように言われている。〈私は谷の百合である(2章1節)〉、更に〈百合が茨の中にあるように(2章2節)〉、即ち、薔薇が茨の中にあるように、と。何故なら、百合が茨の中に生えることはないからである。古代人が百合と解釈しているのに対して、新しい時代のユダヤ人がソサン〔単数形〕を薔薇と解釈しているのは多分この理由からである。しかしまたこの理由から、他の所から裏付けない限り、聖書では〔薔薇とする以外の〕何も帰結しない。⁵¹

上の引用のソサン(ソサナ)およびソサニムは、今ここで訳語が問題になっているヘブル語単語の単数形(2種類)と複数形である。ルターはウルガータの雅歌2章1節と2節をそのまま引用して、その後ですぐ「百合」を「薔薇」に言い換えている。そしてこのように言い換える理由を、下線部で明快に述べている。ところで当時のルターは十分なヘブル語力を有しておらず、ヘブル語原典からの種々のラテン語訳を参照している。詩篇第44篇に関しては、Faberはウルガータと同じ「百合」と訳しているが、Lyraは「薔薇」と解しており、更にReuchlinはソサンに対して「百合、堇、薔薇」(Lilium. viola. Rosa.) という意味を挙げている⁵²。1513年当時の学問的状况では、ソサン(ソサナ)に対して、「百合」、「薔薇」、「堇」という三つの訳語選択の

51 „Rose seu lilia, quod Hebr. Sosanim dicitur. Inde Susanna et Susa. Hic Christum et Ecclesiam significat, de quibus in Canticis: 〈Ego lilium convallium (2, 1)〉. Et 〈Sicut lilium inter spinas (2, 2)〉, i.e. Rosa inter spinas, non enim solet lilium inter spinas nasci. Et hec est forte ratio, cur Iudei recentiores Sosan Rosam, sicut antiqui lilium interpretentur. Sed propter eam rationem nil sequitur in Script., nisi aliunde id probent.“ (Luther: WA, Bd.3, S.249, 33-38.)

52 Raeder 84.

可能性があったことが分かる。そしてルターは「薔薇」という訳語を選択したのであり、この訳語は詩篇第44篇（現行第45篇）のみならず雅歌2章においても、1545年のルター聖書に到るまで保持されるのである。しかし、既に述べたように、現代の改訳ルター聖書では伝統的な「百合」に変えられたのである。